

贈正四位平田篤胤翁著

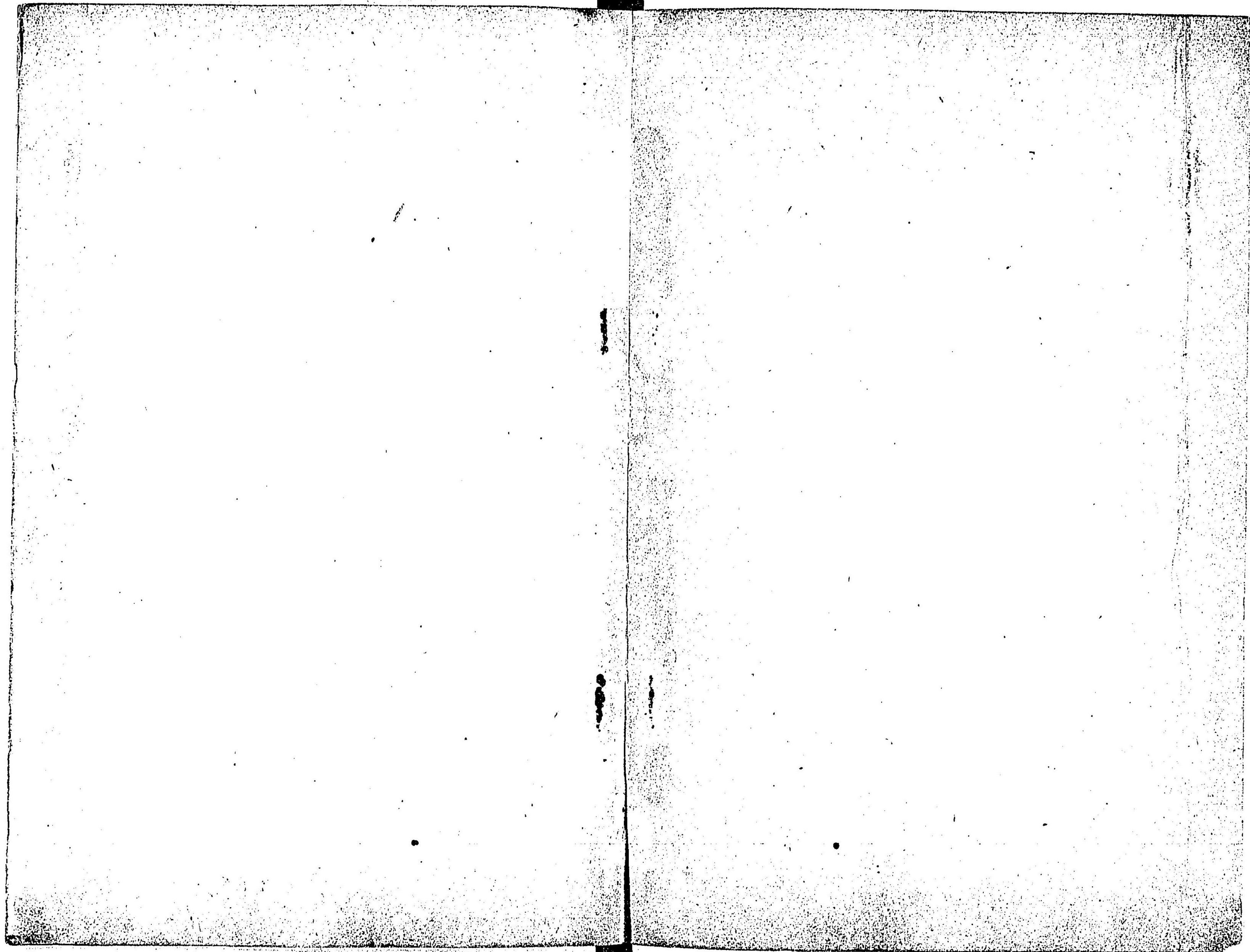
古道大意 全

記念刊行

平田學會事務所

257
647

6
54



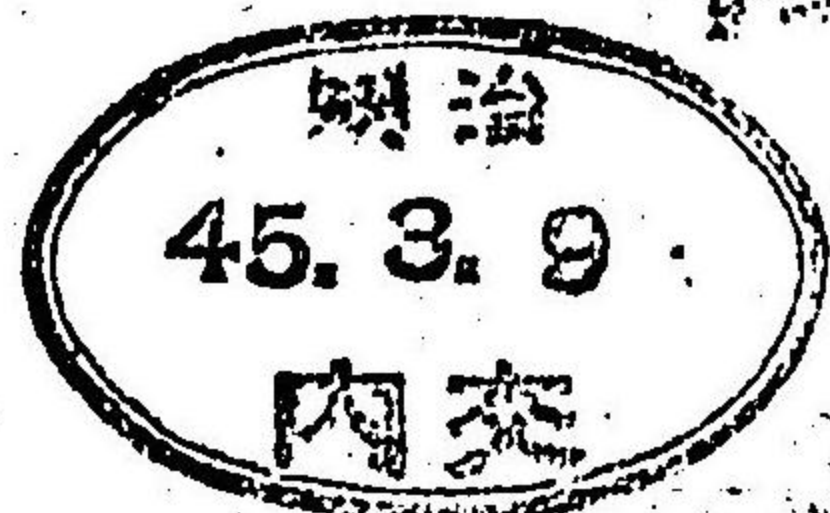
古道大意はしむき

これの古道大意と云ふ書はも。我が神ならふ學びの
おや。伊吹の屋の平大人の。其御許に侍らふ人々に。
古道の趣を。講き聞せ給ふを。承賜はれる教子たち
の。打聴を筆記したるものなるを。後に師の見まし
て。此は能くこそ書取たれと。褒め給へる物なり。
抑この講釋本よ。常言にしも宜へれば。此を披き見
むには。御口づから宜給ふを。まのあたり直に。受
賜はれる如思はれて。いと懇にいと親く。眞の道の
趣の。明かに悟り得らる。最もく有がたく。尊
き御本になむ有ける。拙くをちなき俊秀らが。稱へ
申さむは。中々になめし畏し。然れば其講説を。聞
こと得ざる。遠き境に住居る人々は。こゝよかしこ
と寫し傳へて。拜み讀むも多かれど。今しかく。こ
の御道したふ忠誠人たちの。年々にふえ行て。寫し
傳ふる暇なく。はた寫し誤りも出来れば。こたび
鐵胤君に譲り申して。遠近人の勞きいらすて。容易
く拜み讀べく。千萬のすり本をも成してむと。堅木
の板に彫なして。伊吹の屋の文庫に納めまらせつ。

古道大意序

かゝれば此の御書の。千世に八千世に朽ること無く。
失る事なく。繼々に弘まりて。この正道の。いやま
すく。に榮え行らむ事を。あな樂しきかも。あな歌
ばしきかも。かく言すは。

秋田人 小澤三折俊秀



古道大意の由縁

人としては。人の道を知らずは有るべからず。人の道を知るには。まづ其の父母先祖を知り。國體を辨へずは有るべからず。其の國體をしるには。其の太元開闢の由縁をしらすは有べからず。君臣の等。舜倫の敎。すべて天下を経綸するの道。ことごとく此に起原せり。其の太元開闢の由縁を知るには。我が神典を拜讀せずは有べからず。神典とは。日本紀古事記をはじめ。其ほか

皇朝の古書を云ふ。此の古書を讀て道を辨ふるを。古道學と云ふ。謂ゆる古への道を執て。今の有を御すとは是なり。斯て今世に行はる。道と云ふ道の中に殊に弘まれるは。儒道佛道なり。この二つの道。ともに其のもと外國より渡れるが。先漢土には。陶堯。虞舜など云ひし國主の時に。授禪といふことを爲て。父子の親愛廢り。篡奪の所爲これより始まり。殷湯。周武などいふ首長が世に出ては。放伐を專にして。君臣の義理絶ぬ。この親愛義理廢絶の上は。大道立す。經世の綱紀。則とる所なし。偶に取

べき物あるは小事なり。是かの國代々。長久せざる所以なり。また佛道の趣意は。上下尊卑の分無く。衣食住に離れ。子孫斷滅を好む道なれば。人たるも曾て歸依すべき事に非ず。此餘の道々も。この二つに準へて。各々一區の小徑たる事を辨ふべし。抑わが國の道に於ては。開闢以來。

帝位一とたび立て。君臣の等。萬世勤く事なく。舜倫の敎。はた自然に具れり。これ但し。神これを其の性に賦して。生しめ給へるなり。是を以て治國平天下の道。事實の上に昭々たり。此我が神國の玄妙にして。彼戎夷の少徑と。豈同年の談ならむや。然れば我が御道は。宇宙第一の正道。萬國の君師たれば。六合の内に含養せらるるもの。誰かはこれに寄らざるべき。此を知らざるは不明なり。知りて傳へざるは不實也。學者これを思はざる可けむや。是古道の講説なくは有るべからざる所以なり。謹て記す。

文政七年甲申正月

平田 鐵胤

古道大意上卷

平田篤胤先生講談 門人等筆記

今こゝに演説いたします所は。古道の大意で。先その説く所は。此方の學風を古學と申すゆゑん。また其古學の源。及びそれを開き初め。人にをしへ。世に弘められたる人々の傳の大略。また其のより本づく所。また神代のあらまし。神の御徳の有がたき所以。また御國の神國なる謂。また賤の男我々に至るまでも。神の御末に相違なきゆゑん。又天地の初發。いはゆる開闢より致して恐れながら。御皇統の聯綿と。御榮え遊ばされて。萬國に並ぶ國なく。物も事も萬國に優れてをる事。又御國の人は。その神國なるを以ての故に。自然にして。正しき眞の心を具へて居る。其を古へより大和心とも。大和魂とも申してある。是らの事をもあらまし申し。また神代の神の御傳説。その御所業ごもは。今の凡人の心を以て是を思へば。甚靈く。信じ難く思はれる。其非事を論し。右の事ごもを申す中に。眞の道の趣も。おのづからに籠てある。但し神代のあらまし。及び神の

古道大意上

三

ありがたき所以なごば。實に廿日や卅日。息もつかずし申したればとて。中々以て其の御徳の。廣く尊く妙なる謂の。そりや萬分一も。演説いたし盡さるるやうな事では無いでござる。其を此わづか。二日か三日ほどの間に。申さごと致す事故に。熟々思ふ所が。斯やうにかい摘んで申しては。却て淺々と聞受らるる方も有らうかと。思はれるなれども。此の後追々演説いたす中に。かばかり粗々も。神代の事を申て置ねば。分りかねるごが多いでござる。其ゆゑに止むとを得ず。掻いつまんで。神の御代の沿革りを言は。かけて通るやうに申すのでござる。其故にかの世に誰もいふ。石戸隠のことも申さねば。大蛇退治などの事も申さぬ。猶總べての精細なる事ごもは。古傳説の純粹なる處を撰置て。別段に委く演説いたす。其時に申すことで。しかしなせ又其委き訣をも此處で説ぬとじやと。思はれる人も有うかなれども。是には訣がある。其わけと云は。一體此方の説く古道の趣は。謂ゆる天下の大道で。則人の道である故に。實には此の大御國の人たる者は學ばずとも。其の大意ぐらゐは。心得居べきはずのことで

とざる。然れば其演説をいたすに。誰しの人も。耳に入がたきはすばなき事なれども。今の世の中一般に。儒道佛道を始め。其外も種々の道が弘がつて。各々其下の心に。或は佛道に依るとか。儒道によるとか。扱は俗に謂ゆる神道。または道學とか。又或は心學など云ふことで。居りを付おいたり。又さやうに居りを付をる。と云ふ程のことで無くても。何となく右やうの説どもを。見馴きなれ言馴て。何ぞかぞ下心のないと云は無く。又必かふれて居ぬ人と云ふは有ません。其故に始めより突かけに。此方の專とする古の道を。委く演説いたす時は。とかく彼元より世の人の。見なれ聞馴いひなれて居る。種々の事どもが障りと成て。とツくりと合點のゆく程。眞の意味合を悟り得ず。聞とりかねる故に。心得違ひが出来て。太じき事の紛れと成る。惟まされと成ばかりでなく。其元より心に蓄へたる事と。此方の説く趣が。違つてをるに依て。是を信せず。信せぬに依て聞ほしめせず。其少かばかり聞はつた事共を。固より信せぬまに聞違へ。其聞違へたらしくなとを。其れながらに尾緒を添て。外へ行て。彼此と

誇りなんごもするもので。世間を見るに。さやうの人がよく有るものでござる。勿論是は元より大意の事ゆゑ。よく聞れた處が。實には古道學の萬分一でもない。其の萬分一の片はしを。一席二席さいたぐらゐでは。何とも言へることでは無い。譬へば愛に。大きな牛が一疋ある。然るに盲たる人は見る事能はず。只其尻尾ばかりを拵て見て。その全體をなでも致さず牛は小き獣じやと思つて卑めるやうなものでござる。但し其れしきの誇りは。物の數ども致さぬことなれば。此方はそれにいたしても。此我説く道は。おしつけ申すと分りますが。畏くも此世の始めより。今の現の神の御事實で。殊には古の天皇命の。廣く厚き思召で。嚴重におもんじて。御傳へあそばしたることいも申すこと故。さやうに粗忽で有ては。其天津神國津神。及び古への天皇命の。後の世を思召す。厚き御心に對し奉りて。此方向とも恐多きことじやに依て。先其舊來の。聞なれ見馴て居ることの。正實の有るかたち。又其ひがどをあらあら論辨いたして。人々の心に。扱は佛道にも有れ。儒道にもあれ。心法悟道。又は俗の神道にもあれ。

先づかやうな物と云ふことを心にとめ。居りを付置て。扱其魂の居つた處で。古道の眞意を。古傳説に依て。とツくりと演説致せば。其時こそ此方のとく處に。疑ひは無いこととござる。扱こそ爰では彼なま〜聞て心得違ひ。又は聞はつりを人に語つて。謗るやうなことはあるまいと思つてのこととござる。又さうない處が。とかく何の道何の學び事でも。始めのうちには倦のくるが。世の常の人情じやに依て。長いことの内退屈が有ては。説ます此方もむだ骨をり。又聞く人々も詮ないことで。其ゆる次々に言ふ事を替て。倦のこぬやうに。其事をしたしく。初學の人々の耳に入れ置て。言はゞ面白みを付け。下拵へをして。猶とツくりと眞の道の精密と。委く細やかなる處までを。申したい聞せたいと云ふ本意をもこめて。思ひ付たる。此の古道大意の演説とござる。とは申すもの。此席に説く處ととも。さら〜猥がはしく。穿鑿もしつめぬ事を申すのではないで。誰しの人も。先早く心得べき肝要なることいもを。取集め綴り合せて申すのであるから。是は長げなく。下いことを言ふと思はず。とツくと勘辨を加へて。

聞るやうに致したいこととござる。扱又別段に申すことが有る。それは世間に學問と云へば。一通りのやうにきこえるなれども。甚品々が有て。先此方のおもと致す。御國の學問にも。細かに分ると。七つ八つにも分るとござる。まづ神の道を第一とする一派があり。また歌學と云て。歌の道をむねとするが有り。また律令の學と云ふが有り。又伊勢物語や。源氏物語をおもと學ぶ者が有り。又歴史の學と云て。御代々々の事をせんさくするが有り。また古實諸禮の學問が一つあり。其中にも俗に云ふ。神道と云に又諸流があり。歌學と云にも二三流あり。ざと御國の事を學ぶばかりも。此通りに派が分るとござる。又儒者の學ぶ漢學と云にも。同く御國の學問ぐらゐに派が分る。又佛學。是は諸宗が有て。各その立かたが違ふ故に。學び方もちがふは本よりの事。又佛法から流れ出たる心學など云。ちよこさいな學びを爲て。人に勤める者もあり。是らの譯は別段に。佛道の大意をとく砌に申すつもりでござる。又天文地理の學び。又蘭學と云て。阿蘭陀の學び。また醫者の學問にも。古方後世蘭療など種々差別が

あり。なんと此通り。學問は色々ある。その中に何の學問がいつち大きいぞと云に。ちと自分勝手手のやうなれども。御國すなはち我國の學問ほど。大きい物はないでござる。なせと云に。先近く儒學と佛學との上で申さば。儒者は先四書五經とか。十三經とかいふ類の書物をもよむと覺え。また左國史漢と云て。左傳と云もの。國語と云ふもの。史記と云もの。漢書といふ物などを粗々讀で。さて漢文を綴る方をおぼえ。其ふだんの言ぐさに。詩を作ることも覺え。もう儒者と云て通られるで。是しきの書物をもよんで。是式のとを覺るに。さしも難いことはありや致さんでござる。大方世間の儒者が。皆この位なものでござる。さて其儒者に比べては。出家の方がよつほど廣い。なせと云に己が是非よまねばならぬと極めたる。俗にいふ經文が五千餘卷。馬に付たならば七八駄おらう。其を皆は讀ます。十分一をよんだ所が。ざつと儒者がおもとよまねばならぬ書物の。一陪も有るでござる。其れのみならず儒者は。佛書をよまんでも。事が缺けぬに依てとんと讀す。たまさか佛書をよむ儒者もあれど。そりや百人に一

人もない。僧徒は其れと事かはり。儒者のおもに見る書物をば。子供の時から。文字を知る爲によんでおく。又詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。爰で僧徒の學問は儒者よりは博いでござる。又御國の學問がいつちひろいと云故は。右申す通り。儒學佛學を始め種々さまざまの學問が有て。其道々のころと事とが。盡く御國の學び事に混雜して。譬へば彼の八紘九野之水。天漢の流。注がすと云となしと云ふ如く。有ゆる學事混雜して。大海へ諸の川々より。落て來る水の交つてあるやうなものでござる。其通り入交つてある故に。人の心も多く其れに移り。孰れを是とも。いつれを非とも別ちかねて。言はまごついて居るとが多々有る。夫故に。その混雜を具に分ねば。眞の道の有がたき所も顯れはす。其ころんざつをより分て。眞の道の善となる事をいひ顯さうとするに付ては。よく先の事を知らねば言へず。彼の唐人蘇子由と云者の申したる如く。善與人言者。因其人之言。而爲己之言。則天下之辯者服矣。云々と申たる如く。此方の事ばかり言つてはいかす。たとへば僧徒を論すには。佛書で言ふと

ウの音も出す。儒者をさすには儒書で論すれば。猶に透れた鼠のやうに畏まる。然れば御國の純粹と正しき道を得やうとするには。此に心得なくては叶はぬ事とござる。殊にもろくの學問の道。たとひ外國の事にしろ。御國人が學ぶからは。其よき事を撰んで。御國の用にせんとのとでござる。さすれば實は漢土は勿論。天竺。阿蘭陀の學問をも。凡て御國學びと云ても違はぬ程のこと。則これが御國人にして。外國の事を學ぶ者の心得でござる。扱我が先師たち以來。此方も及ばずながら。此通り氣を付て人にも演説いたすからは。何事も此學問の本意に背かぬやう。背かぬやうにと。吟味に吟味を重ね。古人先達の公論明説に原づき。其説を集めつゝして。演説は致すもの。廣きことの中には。考へ落し言たがひもあらうと存する。なせなれば。篤胤素より不敏の性質にて。中々以て世に多かる事の。萬分一も知り得られることではない故。考へ脱しの有ることであらうと。其れは常に心づかひに思ひ居る事とござる。仍て今聞るゝ方々の中。門人に限らず。いや其はさうでは有るまい。と思はれる衆があるならば。

其趣を言て給はるがよい。其の意見が實に理に當らば。速に改めやうでござる。又不審なことも。問れるやうに致したいものでござる。又神の御上などを申すに至つては。とんと世間普通の學者等の申すとは。違つてをるに依て。さて此は。今まで思ふたとは相違な事じや。鬼神は二氣の良能。鬼神は造化の跡とこそ聞るに。平田の説口にては。信じ難いことじやと。思ふやうな事も有うかでござる。これは此方も本おぼえの有たことで。其も更々無理とは存せぬから。さやうな事も有りの儘に。御不審を承はりたいでござる。唐人も疑はしきは。問んことをおもふとも。又之を如何これをいかんと言ざる者は。之を如何ともすること無しと云ひ。又かの鼓や鐘なども。打かつかねば。鳴もいたさぬやうなものじやと。古人も言て。問答の譬に致したが。是は實にさうでござる。何とぞ今日を始めとして。往々も捨おかず。神の有難い處。道の精密なる處まで。學び付よりつき。聞はさうと。志を振起されまするやうに。致したい物でござる。但し是は今日始めて。此席へ出られたる方々にばかり申すこととござる。

扱まづ第一に申て置ねばならぬ事は。此方の學風を古學と云ひ。學ぶ道を古道と申す故は。古へ儒佛の道。いまだ御國へ渡り來らざる以前の。純粹なる古への意と。古への言を以て。天地の初めよりの事實を。すなほに説考へ。その事實の上に。眞の道の具つてある事を。明らむる學問である故に。古道學と申すでござる。抑この學風の由て來る其始めは。東照大神君その糸口を開かせられ。公子尾張の源敬公。その御遺意を紹せられ。さて水戸中納言光圀卿。大きに興起あらせられたこととござる。此君の世に殊れて御坐ることは。世の人の能く存じ居ることと。則世に水戸の黃門様と申すは。此御方のこととござる。此君が世の中に。唯々唐の學問ばかり行はれて。御國の古き御代の事などは。心とする者のなきことを御歎きなされ。第一には。禁裡を殊の外御尊敬あらせられ。數の學者を御抱へあそばし。先世に有りとある古書を御集なされ。又諸國の神社佛閣。及び在々に至るまで。あまたの人を分遣はされて。いさゝか一枚二ひらに足らぬ物も。古き書物をば。悉く御集めなされ。夫を明細に御吟味有て。神武天

皇の御代より。後小松天皇の御代まで。御代は百代。年數二千年あまりの間の事を。具に御撰びなさせられ。大日本史と云歴史を御作なされ。又神道集成と云をも御撰びなされ。又古書はもとより。堂上方の世々の御記録を始め。數百部の書物の中より。朝廷の御禮儀に關ることどもを。御類聚なされて。五百卷餘の書となされたこととござる。此御大業の御入用として。御高三十五萬石の内。十萬石を分けおかれまして。誠に數十年の御辛勞で。終に御成就なされ。扱朝廷に奉られたる處が。朝廷にも御威料ならず思召し。右五百卷の御書物をば。禮儀類典と云題號を。御つけ下されたこととござる。又其ころ難波に契沖といふ人が有て。是は故有て眞言の僧とは成たなれども。厚く御國の古へを信じ學んで。中頃より亂れ來りし假名遣ひを。古書の古言を證據として是を正し。和字正濫抄と云書を著し。其外いろく發明の書物を作て。其名高く。光圀卿の御耳に入り。殊の外感じ思し召し。度々御使者を遣され。御逢なされたき由を。仰せ入られたなれども。契沖は固く御辭退申て罷出ななだてござる。所が光圀卿には。甚御慕ひな

されて。安藤爲章といふ。御國學に志の厚き御家臣を。契沖の門人に遣はされ。且萬葉集は。殊の外古き歌集で。歌のみならず。博く古へを考へるの助となるべき。結構なる書物なれども。其頃まで世にある所の注解。何れも宜くないに依て。よく古へに叶べき注を仕るべき由。御頼みなされたこととござる。契沖畏まつて。是に於て。萬葉集の代匠記と云ふを撰んで送上しました。此方の萬葉學は。是より始まつたこととござる。光圀卿それを御覽なされた所が。今までの有ゆる注釋とは事かはり。盡く古言古意を尋ねて是を記し。甚すぐれたる物ゆゑに。大きに御悦びなされて。白金千兩。絹三千匹を下されたこととござる。契沖その賜物を更に蓄へず。盡く貧窮の者に與へられたことと云。又右の代匠記を作るとて。夥しく古書を集め考たるとき。その餘力を以て。古今集へも注を下して。是をば餘材抄と名を付たこととござる。是以て其時分まで有たる所の注解とは。雲泥の遠ひにて。誠に結構なものでござる。扱契沖は。元祿十四年正月廿五日に。年は六十三歳で身まかられたこととござる。其著したる書物凡て廿五部。卷數百廿

卷餘もあることとござる。此契沖に追すがつて。荷田宿禰東麻呂翁。俗名を羽倉齋宮と云人が出られて。大きに御國の學問を勵み弘められて。四方に其名高く。既に御國學の學校を。京都へ建うとて。公の御免を受られ。其地をば東山にしつらへやうと爲られたる所が。其事果さず。病に依て身まかられたこととござる。此翁著述の書數十部。卷數百卷餘り有たる由なれども。思ふ旨あるとて。末期に多く焚捨られたるに依て。今纔に遺りたるもの五六部。數卷ならでは有ることなく。然れども我古道學の道紀を立られたるは。此人でござる。此次が賀茂の縣主眞淵の翁。通名を岡部衛士と云ふ人が出られて。家の號を縣居と付られたるに依て。縣居の大人。また縣居の翁などとも申すこととござる。扱この翁。荷田の大人の門人となり。其の本志を紹で勸學いたされたこととござる。その遠つ祖は。神皇產靈神の御孫。鴨建角見命と申して。八咫鳥と化て。神武天皇を導き奉られたる神で。縣居の翁は此神の子孫とござる。代々遠江國濱松の莊。岡部の郷に在る。賀茂の新宮を齋かれたる。正しき家柄とござる。眞淵の翁より五世の祖たる。政定と申

す人は。引馬原の御軍に大功が有て。東照宮より。來國行が打たる刀。九龍の具足とを賜はつた程のこととござる。扱この眞洲の翁は。其師東麻呂翁の上を。今一段上つて。なほ深く考へ。始めて古への道を明かに得んとするには。漢意佛意を清く捨はてねば。眞の處は得がたく。歌を詠むも。古の言を解くも。皆神代の道を知べき便なる由を。懇にとき誨され。扱遂に田安の殿に召出され。御國學の御師範を申上られたとござる。其門人にも勝れたる人が多く。藤原宇萬伎。楫取魚彦。また近頃までも世に居たりし加藤千蔭。村田春海なども。皆此翁の弟子でござる。扱この翁は。明和六年十月晦日に。行年七十三にて身まかられたとござる。其著されたる書物が四十九部。卷数が百巻ちかく有るとござる。此次は即拙者どもが師と仰ぐ。本居先生平阿曾美宣長の翁で。始めは醫を業とせられたるに依て。本居舜庵と稱れましたが。後に紀伊國中納言殿に召出されまして。中衛と改められたとござる。其先祖は。桓武天皇の御裔。池大納言頼盛卿六代の後胤。本居縣の判官平の建郷と申した人の末にて。伊勢の國松阪の

人で。家の號を。鈴の屋と付られたるに依て。世に鈴の屋の大人とも。鈴の屋の翁とも申すでござる。扱この翁の學問の太じきことは。世に類なく。それは其著されたる書どもを讀明らむれば。能く知れることと。申までは無れども。其始めは。漢の學問を深く學ばれて。夫より御國の學びに移り。縣居の大人に從て。其大志を受繼れ。學問の道に於ては。古へより類ひなき大功を立られたとござる。其御心緒の事を。かい摘んで申さば。先其著されたる。うひ山踏と云ふ書に言れたる趣は。人として人の眞の道は。どうした物ぞと云ふことを。知らずに居るべきことではない。學問の志なき者は。そりやどうも爲方は無れども。かりそめにも其の志があるならば。同じくは眞の道の爲に。力を用ふべきことじや。然るに道の事をば。なほざりに差おいて。唯末の事にばかり拘づらつて居ると云ふは。そりや學問する者の本意ではない。と言はれ。又學問は。始めより其志を高く大きに立て。其奥の所まで。極め盡さずは止まいと。堅く思ひこむがよい。此志が弱くては。おのづから倦怠ることが出るものじや。とも言れま

したとござる。此通り人にも教へらるゝ程のこと故に。自分では實に此とほりいたされたとござる。是も亦其著されたる書どもを讀めば。能分りますとござる。又その心の公にして。私なきことは。弟子中へ誠められたる詞に。我に隨つて物學ぶ輩は。我が後に又よき考への出來たらんには。必々わが説に泥まぬがよい。我がいひ置たることにも。違ひたることの有るをば。其違つてをる故を言ひて。よき考へを弘めよ。一體我が人を教ふるは。道を明かにせんとの事なれば。とにもかくにも。道を明かにするのが。我を用ふるのじや。其わけを思はずして。いたづらに我を尊むは。そりや我が心ではないぞと。玉勝間と云書に。かいて置れたとござる。また村田の橋彦と云ふ人が。同國白子の人で。翁の御門人に成たいと云て。文通したる其返事に。おくられたる翁の手紙を。所持いたして居るが。それに言はれまし

らゝとござる候。さりながら皇朝の古道御執心の段。御殊勝の御義。何よりも悦ばしく存じ候。と云ひおくられたことも有ますとござる。世間の歌學者。神道者など名の輩が譬へば歌學者なれば。三木三鳥の傳じやの。てにをはの傳じやの。古今集と云ふの傳受じやのと云ひ。又神道者流のいふ。天の浮橋の傳じやの。土金の傳じやのと云ことを言てさわぐけれども。こりや皆その下心に。汚い物の有てすることと。眞の公なる學問をする者が。そんなをかした事はせぬがよいとござる。其は鈴の屋の本居先生は。右に段々申す通り。同門佗門の差別なく。知られたる程は惜まずに傳へて。清く明らかに。學問のすぢを立て。教へられたる事故に。始めの内は。かの祕事口傳を專とする輩に。甚以てにくまれましたなれども。終に其心の如く世に弘まり。其門人帳を見ますに。弟子のなき國は。六十六箇國の内。唯二箇國ならではない程のことと。殊に享和元年の春上京致されて。四條に舍て居られたる御などは。公家の御歴々がた。學問を公に心がけらるゝ御方は翁の舍りへ御尋有て。御入門なされ。世にも人の知

て居る。中山大納言殿を始め参らせ。富の小路新三位殿。芝山中納言殿など。其外夥しく有ました。ござる。既に其ころ御歌の宗匠と有らせらるゝ日野一位資枝卿ですら。御感心の餘りに。其御孫。日野中宮権大進殿と申すを遣され。翁を師と御頼みなされ。其始めて入せられたる時の御歌が。和歌の浦に行へをたざる海士小船。今より君を梶とたのまん。と仰せられたでござる。此意を約めて申さば。和歌の浦と云ふ浦に。行方を取て居るあまの小船に。御自分を御准なされて。大和歌の道にたごつて居る某じや程に。今より君を師匠と御頼み申すと仰せられたのでござる。此外にも御尋なされたる御かたが。各この意ばへの御歌を御讀なされ。何れも翁をさして。本居先生。鈴の屋の翁。又は鈴の屋の大人と御尊み遊ばし。御頼みなされて。翁の講釋を御聽聞なされ。閑院の宮様。妙法院の宮様までも。翁を召されて御慕ひあそばし。實に千古の昔より。かやうの事はありや致さんでござる。扱爰に一つの話がある。夫は今の世に。戯作者と云ふが有て。彼や此やの書物を見かちり。あそこを取てこゝへ紹ぎ。無

いことも有るやうに。面白くをかしく書取て。其を渡世と爲て居る者じやが。とかく小利口に立回つて。面白さうなことは。猿のやうに人真似をする。既に本居先生の。古へに。高皇産靈神と申すが。天上にまし坐て。世の中の萬の物人種をも。御造り出しなされたと云ふことを。其著されたる書どもに。くれぐれ言て置れ。また大禰津日神と申すが。おはし坐て。世の中のあしき事をつかさどり。大直毘神と申すが。御坐て。其悪きことを。善きに復さうととなされること。是も古書に據て。いひ置れたるを見るに直さま。善玉悪玉と云ふ戯作本を作つて。天道様が。竹の管を以て。子供がシャボンとやらを吹く體に。圖などを書いて世に弘め。また今はやる五冊ものぞか云て。敵討や。因果咄しを書綴りたるを見るに。近頃に出來るものほど。古い詞を交てかき。又一人にてつぶと。小言など言ふ事を。古い詞では。ヒトリゴチテと云ふ。其戯作本に。こんな詞もある。又俗にそれはこれはなど言を。そはこはと云ふ。かやうの詞も戯作者がまねて書く。こりやこりやして。彼等が知てかくと云に。皆我が翁の著されたる書物

が。古へ言で書て有る故に。其を見やう見真似に。やうて見るのでござる。爰に又をかしい事のあるは我が同門の者の處へ。俳諧をする者が來て。それが庭とやらへ。龜の子が來たとて。きつく悦び。其事を文らしき物に書て。持てきて直してくれと云故に。其を書き直し。龜の子が不意に來たと書て有た處を。ゆくりなく直して遣たれば。其人が云には外はよけれども。此ゆくりなくと云詞が有ては。今流行る五冊物のやうで悪いから。昔のよい詞に直してもらひたいと云たで。是には同門の者もあきれたこの話でござる。なんと戯作者どもが態にしる。其眞の言が。けっく俗の詞じやと思ふ程に。翁の徳はゆき渡つて。世に有難き翁なれども。世の人は知らず。唐人も申た通り。耳が聾て。謂ゆるつんぼうなる者は。雷が鳴てもとんと聞えず。盲人は何なる面白き物も見えぬやうなもので。世に道を學ぶの。學問をするのと云人々も。知らず。其徳を蒙つて居れども。此翁の。さばかり有難き先生におはせることをば知らぬでござる。さて翁の著されたる書物が五十五部。巻數百八十餘巻有て。何れも。學問す

る者は。常に傍を放されぬ物で。一部一冊として。是はと人の手を拍ぬものは無いでござる。扱この先生は。享和元年九月廿九日に。御年七十二にて身まかられたでござる。抑中古に。儒佛の道が渡てより以來。世人の心其の風に推移つて。古道の趣は粗略に成行きまして。次第に狃りがはしく。世を経るに従て。古への道は絶たるがごとく。足利將軍の。天下の政事を執申されましたる頃は。誠に亂世の至極でありました處が。織田信長公。豊臣秀吉公。次々出させられて。大きに悪弊をきたため直されまして。天下の人路その威勢には服しましたなれども。猶人心は穩かになりませぬ處に。長くも東照大神君。御武徳を以て天下を治めさせられ。其御仁澤至らぬ限りなく。人々忠孝の道を心得。尊内卑外の旨をも辨へて。次々古へに復り行べき中にも。世を治めさせらるゝには。古道を學べきこと専一なる儀を思召され。天下に命せて。古書を御求め遊ばされ。緊要の書等をば。悉く書寫を命せられ。京都にも江戸にも。駿府にも差置せられたでござる。是らの御事は。當時の御記録どもを拜見いたせば。明かなること。扱

其の多く集めさせられたる古書どもをば。尾張の源
敬公に御附屬なされ。敬公是に依て。神祇寶典。類
聚日本紀など申す書を撰ませられ。又水戸の源義公。
其御志を継せられ。有用の御書ども御撰ありたる御
事は。既に上に申すが如く。是より世に弘まり。こ
の學問に仕へ奉る人々。追々出ましたる中に。身は
下ながら。荷田宿禰羽倉東滿翁。賀茂縣主岡部眞淵
翁。平阿曾美本居宜長翁。この三人の大人等。次々
に勵み學ばれ。その門流も多く。今かやうに眞盛と
相成り。我輩に至るまで。太平の御徳化を蒙つて。
心寛に。古へ學び仕へ奉ること。成たるは。専東照
大神君の御恩頼によること。有難しども尊しども。
稱へ申べき詞もないでござる。猶是等のことは別に
委しく記したる物が有ます。今は彼かけて通ると
申す程のこと故に。大略の中の。又大略を申すので
ござる。

さて此方のとく道の趣は。何に據て申すぞと云に。
古への事實を御記し傳へ遊ばされたる。朝廷の正し
き御書物を本として申すので。一體眞の道と云もの
は。事實の上に具つて有るものでござる。然るをど

かく世の學者などは。盡く教訓と云ふ事を。記した
る書物でなくては。道は得られぬ如く思て居るが多
いで。こりや甚の心得ちがひなことで。教へ申す
ものは。事實よりは甚下い物でござる。其故は。實
事が有れば教へはいらす。道の實事がなき故にをし
へど云ことがおこる。唐の老子と云書にも。大道す
たれて仁義ありと申したは。こを見ぬいた語でこ
ざる。殊に教と云ものは。人の心に親くはしみぬも
ので。其は譬へば。武士の心を勵ますに。軍に出て
は先駆せよ。人に後れるなど書いたる。教への書物
を見せるよりは。古への勇士等の。人に先だち。勇
猛さかんに戦ひ。高名など致したる事實の軍書を見
たる方が。深く心にしみこんで。我れも事有らば。
昔の誰々が如く。適やッて見せやうと云ふ。猛き心
がふり起る。かの先がけせよ後れるなど云ふ教では。
さまで心の振起らぬものでござる。又近くは。君の
仇は討べきものぞと云をしへをきいたるよりは。大
石内藏之助はじめ。四十七人の義士が。千辛萬苦の
難義をして。主君淺野内匠頭殿の仇。吉良上野介殿
をうちたる實のはなしが。身にしみくと髪も逆だ

ち。涙もこぼれるほど。心に深く染るものでござる。
是は誰しの人も。心には覺えの有さうなもので。殊
に教へといふ物は。其心さま其人となりの宜からぬ
者が。言置たる教訓でも。書に記て遺つて有ると。
何さま尤らしく見える物で。唐の教への書物と云も
のには。是がけしからず多い。或は君を弑して。國
を奪たる者などの云た教言にさへ。誠に金科玉條と
云て。玉とも金ともいひさうに。尤らしく書てある。
しかれども其行ひの實を見れば。主殺し國賊じやに
依て。其尤らしく言てある事どもは。皆空言と云て
そらことじや。實が無くて。其書列ねたる處ばかり
が立派では。そりや山賣の能書を見たやうな物でこ
ざる。此等の訣をば夢にも知らず。教への書物で無
ければ。道は得られぬ。教導にはならぬなどと思つ
て。世の常の學者や。道學者など云ふ輩が。夫ば
かりを唱へて居ると云は。片腹痛いことと云は。
唐でも此等の訣をよく心得たるは。まづ孔子一人の
やうでござる。初こそ其申した語に。我欲載之
之。空言。不知見之。行事之深切著明也とあるで
ござる。此意は。孔子の思ふには。人を教ふるに。

夫はさうする物ではない。是はかうするものじやと
云やうに。尤らしき教へ言を記して。人を誨さうと
思ふけれども。夫では人の心に入りかねるから。夫
よりは是を。人の行ひの事實に書著して見せるほど。
深く切に。著るく明かに。人の心にしみることは無
いと云の意でござる。此意ゆゑに。孔子は教の書と
ては。一部一冊も作らずにたい春秋と云記録をしら
べ正して。何の某は。かゝる悪き行ひが有つた。誰
々はかやうの善事が有つたと云ことを。ありの儘に
記して。その記録を讀めば。自から其中に。ちゃん
と悪をこらし。善を勵むことを。人の氣の付くやう
に書取たもので。實に孔子生涯の骨折と云は。此春
秋でござる。夫ゆるに。わが志春秋に在りとも。又
我を知る者は。それ惟春秋か。我を罪する者は。其
たい春秋乎。とも申したでござる。此意は。我存分
に志をこめて。記したる物は春秋じや。此春秋が世
に傳はり。後の人が是を見て。いかにも孔子は。道
を辨へたる人と知れるものは春秋じや。又國々の君
にしる。主弑しは主ころし。親ころしは親弑しと。
有りのままに記したる故に。是は孔子の憚りなきの

じやと。後の世に我を罪に言ひ恥すものも。此春秋
 じやと云の意でござる。是程に心をこめて書きたる
 春秋ゆゑ。いづち實の有るもので。孔子の心のよく
 見えるは。此書に越たる物はない。然るに大かた世
 間の儒者などが。儒書の上でも斯の如く。慥なる歌
 のあるも知らず。只々ひねくった理屈の。教訓を書
 いてゐるは。己が本尊とする。孔子の本意を會得せ
 ず。春秋を熟く讀ぬからの誤りでござる。なんと是
 で眞の道と云ふものは。教訓の書では其うまみが知
 れず。事實の書物でなくては。眞意は得られぬ訣じ
 やと云ふことも。合點のゆきさうな物でござる。
 只今申す通り。眞の道と云ものは。教訓では其旨味
 が知れぬ。仍て其古への眞の道を知るべき。事實を
 記してある。其書物は何じやと云ふに。古事記が第
 一でござる。其ふることぶみと云は。世間の人が。
 古事記とおぼえてゐる書物が。此ふることぶみのこ
 とで。扱この書物が。さうして出來たる物じやと云
 に。掛まくも畏き神武天皇より。第三十九代に御當
 りあそばす。天武天皇の。有難くも厚く思召立せら
 れたる御事で。一體その以前。古くより朝廷にも諸

家にも。記し傳へたる所の。天地初發よりの。古き
 傳説の御書物が有て。其が神代の古言の儘に書て有
 たでござる。處が其に各々誤りも有り。又紛らはし
 きこともあつたと云ふことで。そこで天武天皇の御
 心づき遊ばして。かやうに紛らはしき説が有ては。
 今此時に。よく其正實なる所を撰び定めずは。後の
 世に至りて。孰れを是とも孰れを非とも。分らぬや
 うに成らうと仰せられて。其朝廷の御記録はもとよ
 り。諸家の記録どもを集めて。精密に御吟味あそば
 され。其少かも紛らはしき事なく。正しき所をしら
 げて。御撰成されたる書物でござる。尤も神代の古
 言の儘に。言の清濁をさへ嚴重に御しらべ遊ばし。
 遠ぬやう誤らぬやうにと。先御自らの御口に。御誦
 うかへ遊ばし。其時稗田阿禮と云ふ姫が有て。年は
 廿八歳。殊の外に利發聰明なる人で。口に誦み耳に
 觸たることは。心に記して。いづかな忘れると云こ
 とのない人で有たでござる。そこで其の阿禮を召せ
 られて。彼しらげに精げ遊ばされたる所の。天地の
 初發より。御父帝。舒明天皇までの御事を。天武天
 皇が。御口づからに御教へあそばされて其をとツク

りと。稗田の阿禮に唱へさせ。口なれさせ遊ばされ
 たでござる。是は御國は固より。言靈の幸ふ國と。
 古語にも申して。言語の道を守幸ふ神のおはしまし
 て。其の言語の上に。盡く精密なる。眞の道の趣の
 こもつて有ることゆゑ。其を違へぬやう失ぬやうに
 と。重んじ思召て。扱かやうに致しつゝ讀うかべて。
 言の清濁。上下りまでを熟したる上にて。御書取せ
 遊ばさうとの。厚き御心でおはし坐たが。其うちに
 御代が替て。此御次が持統天皇と申上る。其御次が
 文武天皇と申奉るでござる。所が此二御代の間に。
 何なる故にか。唯かの阿禮が口に誦うかべて有るば
 かりで。御書取せ遊ばさなんだでござる。其次を元
 明天皇と申上る。此時阿禮は。もはや五十有餘で。
 有たでござる。所で此御代の。和銅四年九月十八日
 と云日に。太朝臣安萬侶と云人に仰付られて。夫を
 御書取せなされ。翌年正月廿八日と云に。記し終て
 献せられたでござる。是すなはち安萬侶主の。表序
 に書れたる趣で。此書が即古事記でござる。此和銅
 五年が。今此文化十年よりは。千百二年になるでこ
 ざる。されば此古事記は。畏くも天武天皇の。厚く

思召付せられて。御自ら古傳説の正實なる所を。御
 撰定遊して。御誦うかべなされたる古語で有まする
 から。世に類ひもなく。甚も尊き御典でござる。も
 し元明天皇の御代に。其御志を御繼あそばして。御
 書取せなされずんば。かほごにも尊く有がたき古語
 も。阿禮の姫が命と共に。失果るで有ましたらうを。
 有難くも和銅の御代に。御記し遊されて。今の世ま
 でに傳り來て。斯の如く拜見奉ると云は。有がたし
 とも有難いことで。かりそめにも道に志有ん者は。
 頂に捧持て。天武天皇又元明天皇。二御代の有難
 き思召し。また稗田阿禮。太朝臣安萬侶の恩徳
 を。忘るべきことではないでござる。扱この御記に。
 天地を御始め遊はしたる神々の御事實を始め。其餘
 の事實に。盡く萬の始め。道の趣は具つて有るでこ
 ざる。されば本居翁の歌に「上つ代のかたちよく見
 よいその上。古ことぶみはまそみの鏡。と詠れたで
 ござる。上つ代のかたちよく見よとは。上代の有様
 をよく見たがよい。其の上代の有様を能知うと思ふ
 には。古事記を讀さへすれば。眞澄の鏡の曇なきが
 如く明かに。上代の眞の道は知れると云の意でござ

る。扱拙者の演説いたす所は。此通り明かに知れる。其古事記の事實を本と致して。古への道。神の御上を申すなれば。天武天皇。元明天皇。この二御代の厚き御心も。思召ももつて有ること。かたゞ以て勿體なく。恐多きことゆゑ。何れも其御心得で御聞あるが宜い。此方の身分こそ賤き者なれども。其の申す所は。神の御事實。長くも古への天皇命の。深く厚き思召で。殊には御口づから御誦うかへ御傳へ遊ばしたること故に實以てなほざりならぬ御事とぞざる。

扱世間に。神の道を學ぶと云人が幾らか有て。夫らはもとより。大凡の世の人も。日本書紀のみ尊び。その第一第二の巻を。神代の巻と云て。此二巻を別に板に致し。俗の神道者など。うるさく言痛きまに。注釋をいたして。世の始めまた神の御事實を。しるに。此を除いて。外に書物の無いやうに。思てゐるけれども。其は心得違ひで。其委き訣は。師の古事記傳の始めに。具に記し置れましたが。其大略を申さば。先一體かの日本書紀と申す書は。和銅五年正月に。古事記を御書取せ遊ばして。から八年後

に。四十四代。元正天皇の養老四年五月。尤もこれも勅命に依て。一品舍人親王の御記しなされて。奏上られたもので。其以前に御撰び遊ばされたる。古事記の有るが上に。重ねて是を御撰びなされたる訣は。どうじやと申すに。古事記は右に申す通り。上代の趣をすなほに。有のまゝに傳へやうと。天武天皇の厚く思召たること。安萬侶主も。其大御心を心として。記されたる物故に。只ありの儘で。漢の國史と云もの、體には似もつかず。當時は公にも。漢學問を盛んに。御好み遊したるをりから故に。古事記の餘りに。只有りのまゝに飾なく。見立なくて。淺々と聞ゆるを。歎す思召して。更に廣くことどもを考へ。年紀をも立。また漢めかしき語どもを。飾りそへなんどもして。漢の文章を作し。諸越の國史に似たる國史と立ん爲に。御記なされたものでござる。一體が此やうの御趣意で。御記しなされたる事ゆゑに。とんと漢風で。甚だ古への實を失つたることが多いでござる。抑意と事と言とは。皆相稱つて居るべきもので。夫ゆゑに上代は。意も事も言も上代のさまが有り。後の世は。意も事も言も。後の世の様

が有り。又漢國は意も事も言も。漢國の様の有るものでござる。所をかの日本紀は。後世の意を以て。上代の事を記し。漢國の言語を以て。皇國の意を記されたる故に。相稱はず。こゝで古への實を。取失つたることいもが多いでござる。又古事記は。少かも狡意を加へず。古へより言傳たるまゝに。記されたるに依て。其意も事も言も相稱つて。皆上代の實で。是は專古への語言を主と。記されたるが故でござる。凡て意も事も言を以て傳へる物じやに依て。書物は其記したる言辭が。主とある大切のものでござる。仍て爰に日本紀のかざりの漢文ゆゑに。古への實を失ひ。かつ後世の惑ひを生じたることを。一つ二つ言は。先その神代の巻の始に。古天地未割。陰陽不分。渾沌。如雞子。と云より。然後神聖生其中焉。と有までは。漢籍淮南子と云ふもの。また三五曆記など云もの。其外の書本文をも。彼此とり合せて。かざりに加られたる撰者の意で。此方の古への傳説では無いでござる。此續きの文に。故曰開闢。初。洲壤浮漂。譬猶游魚之浮水上也。云々とあるは。是が實に此方上代の傳説

で。故曰とあるを以て。夫より上は。新に撰者の加へられたる文なることが知れます。若さう無くは。この故曰と書れたることは。何の意とも知れぬでござる。初めの文は凡てさかしく。皆漢國風に書れたる故に。御國の古傳説とは。趣きが違てきこえる。然ればこゝは。古言の訓を附てよむまでもなく。唯序文として差置がよいでござる。既く古人も。釋日本紀に。日本紀卅卷無序。但師說。初文。然後神聖生其中焉。已上者序文也。と云てあるでござる。そもく天地の初發の有さまは。實に我が御國の。古への傳説の如く有ませうものを。何なれば煩くこちたき。異國の傳説をかり用ひて。初めに重ね擧られたることか。今この二つを比べ見るに。漢風の方は。理ふかく聞えて。信にさうで有つたらうと思はれ。古傳の方は。物げなく淺々と聞える故に。誰もく。かの漢籍の説にのみ心ひかれて。日本紀の御撰者。舍人親王を始め。世々の識者。今にいたるまで。皆惑つたものでござる。夫故に此の漢文の處を。道の真意と心得て。煩くうツとしいほど。注釋を背散し。秘授の口傳のと言ひ騒で居たが。扱

扱淺ましく拙いこととござる。又乾道獨化所以成此純男といひ。又乾坤之道相參而化。所以成此男女とある。是らの類の文も撰者の心を以て。易の十翼などの文を採りて。新たに加へられたるさかしら文とござる。また伊邪那岐神を陽神と書き。伊邪那美命を陰神と書かれたるなんども宜くない。これは其の頭上も下も。ひたすら漢めいたる事を。悦び思はれる世で有たる故に。此やうには書れたることなれども。甚て後の惑ひくこと成たてござる。其故は後の世の生漢意の學者ども。同く是を悦んで。その生さかしき心に。伊邪那岐命。伊邪那美命と申すは。唯かりに名を設けたるもので。御神體ある物ではなく。實は陰陽造化を指て云たものぞと心得て。或は周易の理を以て説き。陰陽五行を以て説くこと成たる故に。神代のごとは皆假の作りごとのやうになり。古への傳説は。悉く漢意に奪はれ果て。眞旨の見えぬやうに成たものでござる。抑撰者はさやうのことまでには。御心も付せられず。唯文の漢めくを好きとして。飾のみに泥まれたらふなれども。此文どもは後の世に至て。さまざまの

邪説を招く媒となり。眞の道の顯れ難き根本とは成たてござる。猶此外に。煩くこちたき潤飾の文を加へられて。事實の紛と成たること少なからず。或は神の御名なんごをも。唐の異形の物の名に替替たり。中にも甚しきは。神武天皇の御卷に。弟猪大設。牛酒。以。勞。皇師。焉。かき。崇神天皇の御卷に。盃。命。神龜。以。極。致。災。之所。由。也。と書れたる撰者の御心は。只漢文の潤飾ばかりでは有なれども。後の人は是を實と思ひ。牛酒とある故牛肉を食ひ。神龜と有れば。卜法に龜を用ひたることと思ふに依て。學問の害となることと。牛を食ひ。トに龜を用るなどは。唐でいたすこととござる。また景行天皇の御紀。倭。建。命。の。東。國。を。言。向。に。御。出。立。遊。は。す。所。へ。天。皇。持。斧。鉞。以。授。日。本。武。尊。曰。云々。と書れましたが。凡て古へかやうの時には。矛か劍などをこそ賜つたることなれ。斧鉞を賜はつたることとは。とんごない。夫故に是も古事記には。給。比。々。羅。木。八。尋。矛。と有る。是が實のこととござる。其を強て漢めかさうとて。斧鉞とは書れたもので。語を飾られたるは。まだ客る方も有れど。かやうに物をさへ

に替てかゝれたは餘りのことと。猶この類が夥しく有るでござる。然れども又こゝに。日本紀の勝れたることを言はし。先神代の傳説を。精粗異同に拘はらず。一書に曰。とて悉く古傳の儘に並べ舉られ。又神武天皇より以後は。猶更御代々の御事を。委く詳に載れたるに依て。めでたき御事實多く傳はり。彼の漢風なる飾の文面を除ては。世に有りである御典の中に。此御典程。尊く大切なるはないでござる。されば師の翁の歌に。まつぶさに何で知らまし古へを。やまと御紀の世になかりせば。と詠れたは是故でござる。此等を以て。古事記と日本紀と。互に得失差別あることを知るが宜いでござる。所を昔より。世間の人おしなべて。唯この日本紀をのみ尊び用ひて。世々の學者も。是にはいたく心を碎いて。神代の卷には。煩いほど注釋なども多く有るに。古事記をば。唯等閑に思ひ過して。心を用ふべきものとも思はずに差置たは。どうしたことじやといふに。世の人た。漢籍意にのみ泥んで。大御國の古意を忘れ果たる故で。其甚しきに至ては。古事記を日本紀の。下書(したかき)のやうに心得て居る人さへ有るが。是らは

一向に。事の趣を知らぬ未しきことと。云にも足らぬ非ごととござる。爰に我が鈴の屋の翁は。其漢籍意の好らぬことを悟り。上代の正實なる旨を。ますみみの鏡の曇りなく就見あきらめ。古の眞面目を見るべきは。古事記なることを世に誨し。古事記の傳と云ふ。類ひなくめでたき書。四十四卷をかき著し。古事記の尊き由を知るには。先日本紀の潤飾多きことを知らざれば。漢籍意に迷ひをる痼疾(くわじく)さがたく。此病が去んでは。古事記の宜きことが顯はれず。古事記の宜きことを知んでは。古へ學の正しき道は。知られぬと云ことを發明いたされ。古事記を以て。有るが中の上たる史典と定めて。日本紀をば。是が次へ立られたもので。假令にも。皇大御國の學問に。志の有らん輩は。努々此意を。思ひあやまらぬやうに仕たがよいと。懇に言ひ置れたでござる。扱この日本紀の題名は。日本書紀と書いてあるけれども。やはり俗の言習はしの通り。日本紀と稱して。書の字の無いのが本稱とござる。然れども。其の日本紀と云ふ題名も。心得がたいことと。其はまつ漢の國史の。漢書唐書など云ふ名に倣つて。御國の號

を標られたものなれども。漢國は代々に國の號の替
る故に。其代の號を以て名を付ねば。分り難いから
のこと。皇國の御皇統は。天地と共に遠く長く。御
續遊して。替らせ給ふ事がないに依て。國號を標て。
それと分けいふべき謂はないでござる。斯やうのこ
とに國號を標るは。並ぶ處ある時の爲方でござる。
然るに是は何に對したることかと云ふに。たゞ漢國
に對せられたること、見える。然れば彼を内とし。
我を外としたる題號で正しからず。此後次々に。御
記しなされたる御國史ども。又是に倣つて名づけ
られたは。愈こゝろ得ぬこととござる。夫を後の代の
人が。却て是を高き名と思ふは。何なる心で有りま
せう。此事は師の翁も。くれ〜言置れましたが。
實に心得ぬこととござる。

扱世間の人が。誰も〜此國をさして。神國とよと
云ひ。また我々は。神の御末じやなと〜言ひますが。
實に是は世間の人の申す通りに。違ひも無いことで。
我御國は。天神の殊なる御恵に依て。神の御生なさ
れて。萬の外國等とは。天地懸隔な違ひで。引比べ

にはならぬ。結構なあり難い國で。尤神國に相違な
く。又我々賤の男賤の女に至る迄も。神の御末にち
がひ無いでござる。では有れども惜いことには。其
神國。また神の御末なる所以の本を。知んで居る人
が多いでござる。夫では一向むちやくちやで。折角
神國に生れて。神の御末じやと云ふせんもないと申
すものでござる。夫も更に神國とも。神の御末とも
知らず。そんな志も無く。謂ゆる空々寂々とやらで
居る人は。そりや爲方がなければ。かりそめにも。
神の有難い謂を聞かうとて。此やうに御入來あると
云ふは。既に志の有ると云ふ物でござる。苟くも人
と生れて。眞の道を知りたいと云ふ志が有るならば。
此をば一つ誠の處をしらべて置たいもので。既に唐
國の人すら禮記に。君子論撰其先祖之美。而明
著之。後世也云々。其先祖有善。而弗知。不明
也。知。而弗傳。不仁也。此君子之所恥也。と申
してある。此意は。眞の道を行く人と云ふものは。其
の先祖の美を撰び論め。其事を明かにして。後の世
に著れるやうに爲ものじや。然るに其先祖に。善事
の有るを。知らずに居ると云は。不明と申して。道

理に味いと云ものじや。又其先祖に。善事の有るを
知て居ながら。其をよく明らめ。世にも傳へやうと
思はぬと云は。そりや不仁と云て。言は。先祖に
不實不孝と云ふものじや。是が誠の道をも辿らうと
思ふ人の。恥べき事じやと云こととござる。なんと
唐人すらかやうで。夫に此の有難い神國に生れて。
神の御末とある此方が。其本の所以を知らずに居て
は。なんと口惜いことではないかな。實に御國の人
に限りて。唐土。天竺。オロシヤ。オランダ。シャ
ムロ。カボチヤ等の國に至るまで。凡て此の天地に
有とあらゆる萬國の人とは。とんと訣が違ひ。尊く
勝れてゐることは。先この御國を。神國といひ初た
は。もと此國の人の。我ほめに申たことではない。
先其の濫觴を申さば。萬國を御開闢なされたるも。
皆神世の尊き神々にて。其神たち。悉く此の御國に
御出來なされたることなれば。則御國は。神の御本
國なること故に。神國と稱すは。實に宇宙舉ての公
論なること。更に論なきことなれども。其古傳をば。
傳へ知らざる國々までも。自然と御威光の輝いて。
神國なる事を知たることは。もと今の朝鮮が三韓と

云て。新羅。高麗。百濟と申た時分に。御國の世に
妙なる。ふしぎな有がたい國なることを。彼の國で
聞傳へて。御國は。かの朝鮮からは。東に當る故に。
其國の人が。東の方に。日本と云ふ神國が有ると云
て。きつく恐れ敬つたもので。其の詞のつひ〜世
に弘まつて。今では世間一般に。知るも知らぬも。
神國々々と云やうに成たもので。是は漢人ながらも。
能く言當たることで。其の神國に遠ないと云訣は。
神代の事を學ぶと能知れる。夫はまづ此の世界は。
大造廣く大きいことで。國も勿論たんと有る。其中
で我國ばかりを。神國じやと云ては。どうかうぬば
れとか云すぢに聞えるけれども。上に云ふ如く萬國
の公論で。夫に違ひのないと云ふ證據を。今具に申
さうならば。先以て世の初め。神々からの言傳へに。
此天地の無きことは。本より申すに及ばず。日月も
何もなく。只虚空と云て大空ばかりで有たが。其大
虚空と云ものは。更に〜極しなく大きいことで。
實は口にては。何ともかとも言やうなく。限ないこ
とで。其の限りの無い大虚空の中に。天御中主神と
申す神おはし坐し。次に高皇產靈神。また神皇產靈

神と申上る二柱の。いとく奇く尊く妙なる神様が在らせられたでござる。扱この二柱の皇産靈神の。其くすしく妙なる御徳に因て。其極しもなく限りも無い大虚空の中へ。其状いふに言れぬ一つの物が先生て。其一つの物が。何もなき虚空の中に漂てゐる體が。たとへば雲の一村。係がる所なく。浮てゐるやうで有たと云こととござる。所が其一つの物から。丁ど葦牙の如く。びらくと角ぐみ騰た物がある。其あしかびと云は。葦の芽と云ふことと。則その立騰たる形が。葦の芽のふくやうで有た故に。斯やうに申傳へたものでござる。扱その上つた物の體は。如何なる物じやと申すに。是はいかなる物と云ふこと。傳へがないに依て。申されぬことながら。試に申さば。清くすみ明らかな物でござる。なせさう申すぞなれば。是が則日と成たるもので。後に天照大御神の知し見てより。その御體の御光の照徹り坐て。まのあたり。天つ日と拜奉るを以て知るでござる。扱此物が萌上り騰るほどに。上へ騰つてしたくか廣く大きくなる。譬へば山から。雲のもえ出る時は細くて。言はい葦の芽のふくとも云へき様に見ゆれど

も。上へ升て限りも無く廣くなるやうな物で。御國のいにしへ。則神代に天國とも。高天原とも申し。また唯に天とばかりも申したことでござる。此等の訣は。此次の處で申すと能く訣るから。夫まで待れるが宜いでござる。扱始め葦の芽の如くもえ上りたる時に。夫に依て御生なされたる神様が在る。其御名を。宇麻志阿斯訶備比古遲神と申上るでござる。又其もえ上つてあめと成たる。其づつと上の處へ。御出來なされたる神の御名を。天之常立神と申上る。扱かの元の處。則葦芽の如く萌上つて。天と成たる物の。根と爲つてゐる處より。下へ垂下りたる物あり。是に依て御成なされたる神の御名を。國之常立神と申し。夫に追すがつて。御出來あそばしたる神の御名を。豐斟淳神と申す。此垂下りたる物が。後に斷絶て月と成でござる。扱又上にも非ず下にもあらす。其元の處へ。始めて御生なされたるが。宇比地遲神と申す男神と。須比智遲神と申す女神とが御出來なされ。其次を角楸神。活楸神と申し。其次を大斗能地神。大斗乃辨神と申し。其次を淤母陀琉神。訶志古泥神と申し。此次が人のよく知て居る。伊邪

那岐神と。伊邪那美神と御成なされたでござる。さてはじめに申したる。天之御中主神より以下。此の伊邪那岐。伊邪那美神まで。十七神の御名に。悉く深い訣がある。此をよく心得ると。別して其神々の妙なる道理も。能分ることとござる。なれども先日相断りまする通り。只その道をかけて通ることと故に。是は別に委く申すつもりでござる。但し是うち皇産靈神の御名の義をば。今が今きつと。心得ねばならぬ訣が有るに依て。是をば一と通り申しませうでござる。其は先かくの如く虚空の中へ。一つの物の出來たるを始め。其中より葦芽の如く萌上て。天つ日と成たるも。神々の御出來なされたも。此後伊邪那岐。伊邪那美神の。御國を御生み固めなされて。月日の神を始め奉り。もろくの神々を御生なされたも。又此後も追々諸の神々が。御出來なされて。各々それく主宰て。在らせられるけれども。其元は皆この皇産靈神の御徳に依てなる事とござる。そりやどうして知れと云に。其訣が御名の上に具て有る。其はまづ高と云も神といふも。尊んで申たる詞。又皇と申すは。則御の字の意で。高と云ひ神

といひ。御と云て。此神の御徳を大きにほめ稱たものでござる。又産と申すは。産すると云字。また生すると云字の義で。物をむし生じ出來すこととござる。古歌に。我君は千世に八千世にさいれ石の。嚴となりて昔のむすまで。と云は。昔の生るまでと云ふことと。則それと同じ詞でござる。又今の世にも。むすこ。むすめなど云も。すなはち我むし生じたる子と申すことと。神代の古言の遺つてをるのでござる。又むすびのびは。奇々妙々にして。言にいはいれず測り知られぬ。尊きことを云ふ古言で。まのあたり此世を御照しなされる日輪を。日と云ふのも。熱熱見れば見るまに。はなはだ靈く尊く。奇々妙妙なる物ゆゑに。日とは云ふでござる。皇産靈神は。天地をさへに。御作り遊ばす程の。奇々妙々なる御神徳を具へて。入せらるゝ神様じやに依て。ひとまをす詞をそへて。申上たものでござる。御名の義をついで申さば。天と申す高き處におはし坐て。世にありと有る事物を。生じ御出かし遊ばす奇々妙々に尊き神と申すこととござる。又御名の上で知れるばかりで無く。其は追々に分りますが。伊邪那岐。

伊邪那美二柱の神へ。天の沼矛と申す。御矛を下され。此際へる國を造り固めよと仰せ付られて。御下しなされたを始めとして。世の中の諸事を主宰して在せられる訣が。神代の事實の上で。明かに見えてある。又事實に見えて有るばかりで無く。神武天皇より二十四代に御當あそばす。顯宗天皇の御代の。三年と云春二月のことじやが。日の神。また月の神様が。人に御託なされて。阿閉臣事代と云人へ。御誨あそばすには。我御祖高皇產靈神は。天地をさへ造りました御功あり。仍て神領の民地をさし上られよ。若其の通り差上られたならば。我幸へ守らうと御誨しなされたてござる。是に因て神領の民地をさし上られ。それく仰付られて。御祭あそばし。又こゝかしこへ。其御社を御建遊ばしたなどの。體なる事もあるてござる。扱此の時の。日の神月の神の御誨言に。高皇產靈の御神を。わが御祖と仰せられましたが。此御祖と申すは。近く申さば。御先祖と申す程のことてござる。一體日の神月の神は。伊邪那岐神の御子におはし座ながら。高皇產靈神を。我が祖と仰せらるゝは。どうした訣じやと申すに。諸

の神々の御出来なされたるも。言もて行けば。皆この高皇產靈。神皇產靈神の。産靈の御靈に依らぬといふことはない。其故に日の神月の神様でさへ。皇產靈神様をば。我祖と仰せられたものでござる。既に神代の卷には。産靈の神様に。御子が千五百座ましくしたと云ことが有る。ちいほど申すは。千五百と書てあるけれども。千五百に限たことでは無い。此れは只數の限りなく多いことを。古言には千五百とか。八百萬とか云ふ例で。有ゆる神等を。皆この御神の御子じやと申ても。實は宜いやうなものてござる。其故は。神も人も。皆この御神の産し御生じなさるゝ。奇々妙々なる御神徳に因て。出来るからなことてござる。拾遺集と申すは。三代集の一つで。朝廷の御撰集じやが。其中に。「君見ればむすぶの神ぞうらめしき。つれなき人を何つくりけん」と申す歌がある。此歌の意は。扱々君は情ない方じや。さう情なくさッしやる君を見る度ごに。産靈の神様が。御恨めしう存じます。其訣は。なせ此やうにつれない人を。御造り出しなされたことじやと。染思ひます。と云ふ意で。是はもと戀の歌では有

るけれども。此の時分までは。此神様の御徳を。世間の人もよく覺て居たる故に。斯やうの歌も訣たものでござる。なんと皇產靈の神と申す御名の訣と云ひ。神代の古事を。御記しなされたる事實の上に。何事も其本は。皆この二柱の。産靈の妙なる御靈に因る所以が。明かに見えたると。月の神日の神の御さとし言に。我祖高皇產靈神は。天地を預め造らしし御功ありと。體に御さとしあそばしたることなごで。此神の御徳の有難いことも。實に天にまじ坐て。世の中を主宰して在せらるゝ訣も。よく分ることてござる。さ。是程によく道理の見えてあることでも。唐や天竺の學問を。わるく仕損つてゐる學者や。又は學問がなくても。生さかしらに生れ付た輩などは。其己が生れて出たるも。直ちに此御神の産靈の御靈に依て。出来たる物なることを辨へず。猶しつこく疑はしく思つてそりや此國きりの昔ばなしで。實にさうだか。信じられぬなご思ふものでござる。さやうの族には。まだく申し聞す事がある。なんと御國ばかりで無く。諸の外國に。人だねの生たるものも。又悪いながらも國らしくなり。夫々に物の出来たる

も。皆此神の御靈に因ることて。其證據には。其國國に。各々その傳へが有る。夫は先唐の古傳説に。此神の御事を。上帝とも天帝とも。或は皇天とも名づけ奉つて。其神が。天上に坐まして。世を主宰して。人も其御靈に依て生じ。又人の性に。仁義禮智と云やうな。誠の心を具へて居るものも。皆この上帝のなされることじやと云ふ傳が。形の如く傳つてある。是はからの書物でも。ぐつと古く。詩經。書經。論語など云ものを見ても。眼を活して見るとよッく知れる。但し漢土は。生さかしらな國俗ゆる。夫ををかくし寓言のやうに。とき柱た説ごもが有るなれごも。其事は。先年鬼神新論と云ふ書を著して。具に辨じて置いたてござる。又天竺の古傳説に。産靈神御ことを。大梵自在天王と稱し。また梵天王とも申し傳へて。是もやッぱり其神が。切利天と申す。至て高い天上に御坐て。世の中を主宰して。尤天地も人間萬物も。皆此神の造たもので。此神はご尊い神はないと。上古から言傳へたものでござる。所がはるか後の世に釋迦と云人が出て。佛道と云ことを。己が心を以て作り始め。神通と云て。實は幻術じや

が。其の幻術を以て人を惑はし。其の梵天王。帝釋天のやうなことで無く。其を供にもつれる程の。けしからず尊い。佛と云がある云て。大それたる妄説を弘めたものでござる。所を昔から博識な僧徒も。いくらか出たなれども。釋迦が妄説に目がくらんで。此の訣を云た者は一人も無いでござる。是らの委い訣は。佛道の演説に申すつもりでござる。又天竺よりも遙西の方にも幾らともなく國が有て其國國にも。夫々に天つ神の。天地を始め。人また萬の物をも。御造なされた云ふ傳へが各々有る。是も圖書と云て。阿蘭陀の書物を見るとよく知れるでござる。さア。なんと此通り。萬國いひ合せたやうに。天津神の天に御座まして。萬を産なし給ふと云ふ傳へが。訛りながらもあるを考へ合せて。皇國の古傳説の。小縁ならぬ訣がしれるでござる。然れば世に神々は。甚もく多く御し座せども。此御神は。其大本にましく。殊更に尊くおはし。其産靈の御徳。申すも更なる御事じやに依て。有るが中にも仰ぎ奉るべく。崇め奉るべきは此神様でござる。夫ゆゑに。神武天皇の御代に。天皇命御自ら。鳥見

の山中に。祭時を御立あそばして。御祭なされ。又八柱の神々を。朝廷の御守神と御祭りなされたるが。其の第一に。此の御産靈神二柱を御祭りなされ。次に玉積産日神。つぎに生産日神。つぎに足産日神。此外は。大宮乃賣神。御食津神。事代主神。以上八柱なり。則神祇官の八神と申し奉るは是でござる。此中にも。玉積産日。生産日。足産日の三柱は。伊邪那岐大神の司命の御靈の神におはしますこと。別に委く考へ置たでござる。扱かほごまでにも。産靈の御神を。重く御祭りなされ。又右に申す通り。唐南蠻。クロンボウの國々でさへ。此神の御徳をば。第一と崇め奉る事の中に。其の神國に生れて。神の御末とある。此御國の人のよく辨へて。齋き奉らぬと申すは。あまりと云へば不糾なことで。勿體なしとも勿體なく。畏きことの限りでござる。とは申すもの。世間の人が押並て。古への學問をするものでも無いから。是はどうかと云へば。世間の人の不糾しではなく。今までの世々の學者が。由なき漢さへづり。佛意の生さかしらにのみ惑ひはて。此神の御徳に氣がつかず。不辨へて。此神の御徳を。

世の人にとき聞せなんだ故でござる。但し其生狡意な學者ごもは。夫にして置ても。近くはよッく世の中の人と言ふことに。是は御天道様のなされる事じやの。或は御天道様が。此方をかやうに。御生付なされたの言ひますが。其の天道さまと云は。何のこととも知らず。申さばむぢやで申て居るが。是は古へに。此神の御徳を。世の人が能辨へて。かの拾遺集の歌に。「君見れば産靈神ぞ恨めしき。つれなき人を何造りけむ」と云た心ばへに申したる。詞と意の存つてゐるのでござる。何はとも有れ。此神の尊ぶべく齋奉るべき謂を知らず開ぬ内は。そりやしかたがないが。もうかやうに聞て。なる程と思つたらば。速に其の神號を覺え奉つて。齋奉るが宜いでござる。なせと申すに。こりや驚いやうなれども。天地をさへに御造り遊ばし。又萬の事を掌られる。諸の神等も。此御徳に依て。御出來あそばしたる程の事で。天地の有らん限りどころではなく。未天地も無かりし以前より。おはし坐たるを以て見れば。譬ひ天地は何になるとも。世に無窮に大坐々て。幸へ恵み給ひ。既に此方おたがひ。釋迦も孔子も。猫

も杓子も。皆此神の産靈の妙なる御靈に因て。生れ出たる物じやに依て。其本を忘奉らぬと云ふ。道の誠をたざるでござる。漢國の如く。古傳説の儘ならぬ國人ですら。孔子などは。罪を天に獲れば。祈る所なしと申したが。此の意は。天帝すなはち天つ神の御咎めを獲ては。外に祈る所がない。なせなれば。天津神は。諸の神の君の如くに坐ます故に。ごうもならぬと云の意でござる。猶孔子の此語の意は。鬼神新論と云ふ書を著して。具に論じおいたでござる。穴かしこく返す返すも。此御神の御徳は。朝夕に忘れ奉らぬやうに是はきつと心得られるが宜いでござる。扱又先年。伊勢平藏平貞丈先生と云ふ人あり。此人は天明の末あたりまで。世に居られたる人で。有職古實の學問。又は武士道の學びに秀でられたる先生で。世に此家の學風を伊勢流と云ふ。なせなれば。足利の盛なる時分。殿中内外の古實を主られたる。伊勢伊勢守より以來連綿として。今も御旗本衆で。其古實と云を傳來してゐらるゝゆゑに。伊勢流と申すでござる。扱この貞丈先生の申されたる言に。書物を見るには。古への眼。今の眼と

いふことを心得て。讀ねばならぬことじや。其の古への眼と申すは。古の書物を常に多く見なれて。古代の風儀をよく見知たる眼を云ふ。又今の眼と申すは。今の世當時の風儀ばかりを見馴て。古代の風儀をば。一向に見知らぬ眼を云ふ。扱古への眼を以て。今の世の趣きを見れば。今の風儀が明かに知れる。今の眼を以て。古代の事を見る時は。古代の事をも。今の風儀の如くに見なす故に明かならず。疑はしきことばかり有て分らぬものじや。譬へば古き書物に。金百兩とあるは。煉金と云物を。秤目で百兩のことなるを。今の眼を以て見れば。金子の小判百兩の如く見える。又古き書に八丈絹とあるは。尾張の國より出たる物で。長八丈の絹なるを。今の眼を以て見る時は。八丈島より出る絹と同じ様に思ふ。こんな類が殊に數へ盡されぬほど多いことじや。と云ひ置れたでござる。是は學問の上ばかりで無く。今日の家業づくにも。本を知つたぞ知らぬとでは。きつく慮の違ふことが有るものでござる。殊に學問と申すものは。何の上にも及ぼして。用にたて。働きをつくる爲の物ゆゑ別してのこと。先古き世の事を

よく温ね明らめ。高い處に上つてゐて。夫から下を見下す時は。今の世の低く新しい事は。さしも骨を折らずに分るものでござる。是じやに依て。唐人も。故を温ねて新きを知らば。以て師たるべしとも申たでござる。今の世おのが身の上にも。靈き事は幾らも有れども。常に馴れてゐるから。其身をもあやしとも思はず。たまさか神異なることでも有ると。大きに惑ひを生ずる事が多いでござる。所を古への學を爲る者は。古へと云へば。此上もなき天地の始めから。奇しく靈しく。妙なる事といへば。此上も無き天地をさへに始められたる神々の御事實をよく明らめること故に此上の高い事はないから。神代の神の御上を。今の眼を以て。今の凡人へ引べつして疑ふやうな。固陋なる心は起らず。此を及ぼす時は。何の上にも流通すること。とかく何の學び何の業でも。ぐつと高い處を爲ておくが宜でござる。譬へば本歌と云て。眞の歌を詠むものは。連歌はなんの苦もなくでき。連歌をよくする人は。發句が何の苦も無く出来るを見ても。とかく人は。高いことを覺えるがよいでござる。又貞丈先生の言れましたに

は。書物を讀で。其文の義をどくに。唯一方にはかり偏て。外に通じ渉らぬは。偏見と申て。片寄つた書物の見やうと云ものじや。また文の義を解くに。轉用旁通と云て。此事にも當り。彼の事にも當つて滞りのないが活見と申て。眼を活して書物を見ると申すものでござる。又偏見と片寄つた見やうの人は。憤悱と云て。事を開き。發明するやうなことは無い。活見と云て。眼を活して書物を見る者は。事を開き。發明する。憤悱の勢ひがある。と申されたるが。是以て學問の上ばかりではない諸事に行渡ること。今の世に漢學する人々。又漢意の狭き惡癖の付たる人などは。多く今の眼を以て古へを思つたり。又かれを考へるに是を以てすると云やうな。活見の人も少ないでござる。どうぞさう無いやうに致したい物でござる。

扱御國の言に。凡て加美と申すは。古への意を尋ねれば古への御典に見えたる。天地の諸の神等を始め參らせ。其を祀り奉る社にまし座す御靈をも申し。又人は更にも云はず。鳥獸草木の類。海山なんど。其外何にもあれ。尋常ならず殊れたる徳が有て。畏

み恐るべき物を。加美と申すが古へのさまで。其のすぐれたると云は。尊きこと善きこと。いさをしき事などの。殊たるばかりを云では無く。悪しきもの奇き物なども。世に殊れて畏きをば神と申すでござる。扱人の中の神は。先掛まくも畏き天皇御代々。みな神に座ますことは申すも更なること。其は萬葉を初めとして。古くより歌にも。遠つ神とも稱して。凡人とは遙に遠く。尊く長くおはし座が故でござる。斯くて次々にも神なる人。古へも今も有ること。又天の下に廣く流通したることでは無くとも。一國一郡一村一家の内に付て。其程々に神なる人は有ること。其代の人皆神々しく有たる故に。神代とは申すでござる。又人ならぬ物では。雷は常にも鳴神と申せば。本より神なること論なく。又龍天狗狐などの類も。すぐれて奇異く畏き物ゆゑ。是も神でござる。又虎をも狼をも神と申したること。日本紀。萬葉集などに見え。また伊邪那岐大神は。桃子に。大加牟豆美命と申す名を賜はり。また御頸の玉を。御倉板擧之神と申たる類ひも有る。又神代紀や。俗に

中臣祓と覺えて居る。大祝詞にもある通り。磐根木株艸葉などが。神代に物言たることがある。是も神でござる。扱また海山などを神と云たることも多い。夫は其御靈の神を云では無い。直ちに其の海をも山をも指して神と申たもので。是らも山は高く聳え。海は深く。渡るにも越すにも。甚かしこき物なるが故に。神と申すでござる。そもく神と申す古への意を尋ぬるに。斯くの如く種々さまざまで。貴きもあり賤きもあり。強きもあり弱きもあり善きもあり惡しきもあり。心も行も。其のさまざまに随つて。とりぐなることで。その貧き賤きにも段々が有て。最も卑き神の中には徳が少なくて。凡人にも負けるさへ有り。其れは彼狐などは。其異き事を爲すことは。いかに賢く巧みなる人といへども。掛ても及ぶべきことではなく。實に神でござる。然れども又常に狗などにさへ。制せられるやうな。微き獸でござる。さやうの類の。一向いやしき神の上をのみ思比べて。何なる神といへども。理を以て向ふには。恐るべきことは無いと思ふ人も。世には多く有れども。是らは尊いと卑いと。其威力の。大きに

相違あることを辨へぬ非事でござる。扱かくの如くの訣じやに依て。神と申すものは。とんと一様に定めては申しがたい物でござる。然るを世の人が。神をば凡て外國に謂ゆる。佛菩薩。聖人など。同類の物の如く心得て。當然の理を以て。神の上を推さうとするは。甚しきひが事で。惡しく邪なる神は。何事も理に違つた所爲のみ多く。又善き神じやと申ても。其はごくに従つて。正しき理の儘ではなく。事にふれて。怒り給ふ時などは。御荒びなさるゝ事も有り。夫は崇神天皇の御代に。三輪の大物主神の。疫病を御はやらしたるなごを思ふが宜いでござる。惡しき神とても悦んで。御心の御なごみ遊ばしたる時は。幸ひ恵み給はることの。絶えて無いと申すでも有るまいでござる。又人の上にとりては。其しわざの。差當ては惡しく思はれることも。賊には善く。善いと思はれる事も。實には惡き理の有るなごも有らうでござる。すべて人の智は限りが有て。眞の理は。得知れぬ物じやに依て。とにかくに神の御上は。狼りに測り云ふべき物ではないで。況て善いも惡いも。いと尊く殊れたる神等の御上に至ては。

最もく靈く。奇々妙々に座ますに依て。更に人の小さき智慧を以て。其理などは。千重の一重も。測り知るべきことではない。唯その尊きを尊び。かしこきを畏み。恐るべきを恐れて有べきものでござる。扱その御國の古へ。加美と申すは。右の越で有る所を。遙に後の御代に。唐の文字が渡り來て。其の加美と云ふ言へ。唐の神の字を充たもので。是は能當てをると申すうちに。七八分は當つて。二三分はあたらぬ訣がある。其れはまづ。御國で加美と申すは。さつと其の實物をさしてのみ申して。紛はしい事はない。然るを唐で神の字の用ひ様は。實物の加美を指して申すはかりでなく。唯其の物を稱て。靈異と云ふやうな心ばへにも用て。譬へば神劍と云時は。あやしき劍と云ふこと。神龜といへば。あやしき龜といふことになる。御國で神と申す時は。必實物を指して申す故に。是らの違ひが有る。但し又一つ。御國語に。神何と。神の字を上につて言ふことがある。其れは。神事。神はかり。神伊邪那岐命などの類。何れも美て申す。謂ゆる尊稱でござる。尤是は。カミとは言はず。カムと唱へることとござる。一體

御國は言語の國で。元は神字の假字のみ有て。漢字の如き義理ある字は無く。詞をのみむねと傳へたる處へ。漢字が渡て。その漢字を。御國の言語へ當てたる故に。義理の分り易いこともできたなれども。又かれこれ打合はぬ字も多くあるでござる。其れは段々聞かれるうちに。追々合點のゆくこと。然るを世の常の學者等が。斯やうの訣を辨へず。漢字の義理にばかりすがり泥んで。此方の御事實を説くに依て。誤りたることも。又夥しいでござる。

古道大意下卷

平田篤胤先生講談 門人等筆記

扱先日(あつひ)の演説(えんせつ)に申したる通り。世の始め。かの大虚(おほなごころ)空(そら)の中に漂(たふ)つたる一つの物(もの)より。葦芽(あしな)の如く萌上(もえあ)つて天(あま)と成(な)り。其の天(あま)の根(ね)を爲(な)してある。一つの物の底(そこ)にも。又一つ(また)の物が垂(た)り下(くだ)り成(な)り。それに國(くに)之常立(とこたえ)神(かみ)と。豊斟(とよみ)野神(ののかみ)とがおでさなされたてござる。其の垂(た)つたる物(もの)を。根國(ねくに)とも。根堅(ねかた)洲國(すくに)とも申したるが。是れが後に斷離(たぎ)れて。今(いま)のあたり見奉(みまも)る月(つき)と成(な)つたてござる。扱(あ)その天(あま)は。其のもえ上(あ)つたる始め(はじめ)より。すみ明(あ)かな物(もの)で有(あ)つたる所(ところ)を。今(いま)また天照(あまてらす)大御(おほみ)神(かみ)の所知(し)食(く)こと成(な)て。其の御光(みひかり)が照徹(てらとほ)りて。ますます明(あ)らかなのでござる。さて此(こ)の天照(あまてらす)大御(おほみ)神(かみ)の。高天原(たかまがはら)を所知(し)したと申(まを)す御傳(みでん)を。世(よ)の神道學者(かみのみちがくしや)などが。天(あま)と云(い)は都(みやこ)のことで。則(すなは)ち天照(あまてらす)大御(おほみ)神(かみ)を。天子(てんし)の御位(みゐら)につけ奉(まも)つた事(こと)を。天(あま)へ送(おく)上(あ)げたと云(い)つたものぢやのなんのと。生發(なまかひ)意(い)を申(まを)すけれども。皆心(みなこころ)にまかせたる漫言(まなごころ)で。天(あま)つ神(かみ)の御傳(みでん)へ。古(いにしへ)への天皇命(てんかうのみこと)の厚(あつ)き思召(おもひまを)で。正實(ただまこと)を御傳(みでん)へ遊(あそ)ばしたる。神(かみ)の御事實(みでんじじつ)を

とき紛(ま)らかしたる奸曲(こころがへ)。その罪輕(つとみ)からぬこととござる。扱(あ)また月讀(つきよみ)命(のみこと)をば。夜(よ)の食國(くはくに)をしろしめせと仰(おほせ)られて。月(つき)を知(し)しめす神(かみ)と成(な)され。是(こゝ)に於(お)いて伊弉(いせ)那岐命(なせのみこと)は。初(はつ)め高皇產靈(たかみかみうぶたま)神(かみ)より。詔命(みこと)を御受(みまう)なされたる。御功績(みこうせき)が立(た)たる故(ゆゑ)に。すなはち再天(またあま)に御上(みまう)りなされて。其事(こと)を御祖神(みそかみ)へ。復命(かへりたま)おふせ上(あ)げられて。此(こ)の後(のち)永(とこ)く天上(あま)にある所(ところ)の。日少宮(ひのかみや)と申(まを)すに留(とど)まつて入(い)せらるゝことと。扱(あ)この伊弉(いせ)那岐神(なせのかみ)の御目(みめ)より。月日(つきひ)の神(かみ)の御生(みまう)れなされたと云(い)に。能似(あた)たる説(せつ)が。漢土(かんつち)の古(いにしへ)き傳説(でんせつ)にもある。夫(こゝ)は天地(あまのつち)の始め(はじめ)の時に。盤古(ひんこ)氏(うぢ)と云(い)が出て。其(こ)の盤古(ひんこ)氏(うぢ)の左(ひだり)の目(め)が日(ひ)となり。右(みぎ)の眼(まなこ)が月(つき)と成(な)たなど云(い)ふ説(せつ)のあるのは。こりや御國(みくに)の古傳説(こでんせつ)の訛(まが)りながらも。彼(こ)の國(くに)へも傳(た)へ遣(た)つたものと見えるてござる。但(たゞ)し爰(こゝ)に一人(ひとり)。此(こ)の方(かた)を難(たが)する者が有(あ)て申(まを)すには。先刻(せんこく)から承(うけ)はる所(ところ)が。神代(かみよ)の事(こと)を講釋(かうせき)せらるゝに付(つ)て。大分(おほぶん)外國(がいこく)の似(に)よりな傳説(でんせつ)を引言(ひきごころ)にい(い)はれますが。先(まづ)その如(ごと)く。外(ぐわい)の國々(くに)にも。我(われ)古傳説(こでんせつ)と同(おな)じやうな説(せつ)が有(あ)ては。我(われ)か神代(かみよ)の傳説(でんせつ)が正(ただ)しいとも申(まを)されませぬ。なせと云(い)に。若(も)その外國(がいこく)の人々(ひと)が。一(ひと)所に寄集(よ)り集(あ)つて。各々(それぞれ)其(それぞれ)の

の國(くに)の古傳説(こでんせつ)を語出(ことば)したる時に。何れも何れも。我國(わがくに)の傳(でん)へが正(ただ)しい。我國(わがくに)は本(もと)ぢや。わが國(くに)は日神(ひのかみ)の御本國(みもとくに)ぢやなど云(い)ひ争(まを)つたならば。誰(たれ)が夫(こゝ)を裁斷(さいだん)して。是(こゝ)を果(は)したもので有(あ)らう。なんと天地(あまのつち)初め(はじめ)の時(とき)より。生(な)て居(ゐ)る人(ひと)はありやすまいし。夫(こゝ)に外國(がいこく)の説(せつ)は誤(あや)で。我(われ)神代(かみよ)の説(せつ)ばかりが正(ただ)しいと云(い)は。どうか我家(わがや)の本尊(ほんそん)が尊(そん)いと云(い)たやうで。愚負(おろそ)のさたが過(あや)るやうだが。どうでござる。又(また)さやうに紛(ま)はしき説(せつ)が。此(こゝ)にもかしこにも有(あ)ては。何れが是(こゝ)とも非(ひ)とも。定め難(たが)いことぢやに依(よ)て。神代(かみよ)の事(こと)おツくるめて。先(まづ)は信(まを)せぬ方(かた)がましであらうと難(たが)じたてござる。なんとかやうに難(たが)じられては。傍(わき)より見(み)ては。らと困(こ)るで有(あ)うと思(おも)はれませうが。一向(いっかう)こまる訣(くせ)ではない。こゝが却(かへ)つて學問(がくもん)の徳(とく)の見(み)える處(ところ)で。則(すなは)ちこれに對(たい)して曰(い)ふには。先(まづ)右(みぎ)の如(ごと)く紛(ま)はしき處(ところ)をも。學問(がくもん)の眼(まなこ)を以(も)つては。其(こ)の眞偽(まことごころ)忽(たち)に見(み)分(わか)ることぢや。今(いま)これを近(ちか)く譬(たと)へていへば。定家卿(さだけのきやう)の小倉山(こくらやま)の山莊(さんじやう)にて替(か)れたるのは。本(もと)より一首(ひとしゆ)が一枚(まい)づゝならでは無(な)きはすもので。所(ところ)を管家(くだんけ)の歌(うた)にもせよ。輝丸(てるたま)の歌(うた)にもせよ。其(こ)の一枚(まい)づゝ有(あ)べき物(もの)を。十人(じゅうにん)が持(も)つて

居(ゐ)て。各々(それぞれ)是(それぞれ)が眞(まこと)ぢやと云(い)ひ争(まを)ふ。こゝでは甚(た)紛(ま)らしいやうなれども。古筆見(こひつみ)とか云(い)やうに。よく目の利(と)いた人は。夫(こゝ)を悉(ことごと)く見(み)分(わか)て。十枚(じゅうまい)の内(うち)から。一枚(まい)眞(まこと)の色紙(いろし)を見(み)出す。ちやうどこんな物(もの)で。夫(こゝ)を見(み)分(わか)ることができず。押並(おしな)て偽物(いつはりもの)であらうと捨(す)るのは。そりや利發(と)のやうには聞(き)ゆれども。見(み)分(わか)る眼(まなこ)の具(ぐ)らぬので。未巧者(まいたかもの)の至(いた)らぬと云(い)ものでござる。然(しか)れば神代(かみよ)の傳(でん)へを。外國(がいこく)に似(に)よりの説(せつ)が有(あ)ては。紛(ま)はしいとて信(まを)せぬのも。是(こゝ)と同じことぢや。其(こ)の撰(ま)び分け見(み)分(わか)ることを。今(いま)一つ近(ちか)きことの上(うへ)でたとへば。米(こめ)の商賣(しょうばい)をする者(もの)などが。米(こめ)を見(み)分(わか)るのに。五箇國(ごかんとく)十箇國(じゅうかんとく)の米(こめ)をませ合せたるを。一握(ひとにぎり)り見(み)せると。是(こゝ)は美濃(みの)の上(うへ)米(こめ)。これ(こゝ)は仙臺(せんたい)。是(こゝ)は九州(きゅうしゅう)米(こめ)と云(い)ふやうに。一粒(ひとつぶ)々々(それぞれ)より分(わか)るでござる。しろうとが見(み)ては。どうか虚言(うそごころ)らしく思(おも)ふやうな物(もの)ぢやが。其(こ)の撰(ま)分(わか)たる處(ところ)で見(み)ると。なるほど米粒(こめつぶ)の形(かたち)が各々(それぞれ)違(ちが)う。見(み)紛(ま)ふべきやうは無(な)く。爰(こゝ)で素人(すねり)ども。とんと閉口(へいこう)することと。學問(がくもん)も其(こ)の如(ごと)く。よく公(こう)に學(まな)んだる其(こ)の精密(せいみつ)なる。かの古(いにしへ)と今(いま)に通(と)るべき眼(まなこ)をぐツと見(み)開(ひら)き。事實(じじつ)と古(いにしへ)に徴(しる)して考(かん)へる時は。此(こ)位(くらい)な事(こと)は何(なに)の苦(くる)

もなく分ること。中々以て我神代の古傳説は。たとひ外國の似よりの説がいくら有つたればとて。自からの實事にためし見るに。動かぬ事と云ざる。然らばなせ又其誤がちなる。外國の説を引くと云に。是が彼足代でござる。足代の、生さかしき人の。古傳説を疑ふ者を論ずには。誤りにもせよ。外國にも似寄た事のあるを引て聞かすれば。考合せて。さては諸の國々が云ひ合せたやうに。かやうの傳へが有ては。何れ此の事は。有たることには相違ない云ふ心が先出来る。其心の出来たる上では。彼と此と考へ合せて。諸の國にいひ傳へたる説の中に。殊れて御國の古傳説が眞實ぢや。小縁ならぬことぢやと。疑ひの速かに晴る人も。まゝあるものでござる。外國の似よりの説を引のは。其悟を得せんが爲で。さやうに悟つた上では。もはや外國の引言は。無用と成ていらぬ物でござる。是は佛書の譬なれど。月の在所を教へんとするに。指をさし上て。あれ／＼あそこよと云て教へはいたすなれども。其の人が月を見つける時は。其のさしをしへたる指が。もういらぬ故に引てしまふ。ちやうどそんな物で。外國の

似よりの説を引て申すのは。御國の古傳説を見つけてさせん。指教へたる指ぢやと思はるゝが宜いでござる。伊弉那岐伊弉那美二柱の神様が。始め天つ神の詔命を御受なされて。おのころ島へ御下りなされて。大八島國を次々御生遊ばしたる事を。やうにかい撮んで百が一を申ては。實は事も分らず。僅ばかりの年數のやうにも聞こゆるなれども。神の御壽命は。いと／＼久遠と云つて長いことで。實は計り知れぬことと云ざる。夫は年數の積つたことでは有るけれども。猶此時までも。未だちやんと御國もでき終たと云ではないで。然れども種々の神々を。御生置なされたる事ゆゑ。追々其の御末がふえて。中にも須佐之男命の御末が。きつく御勢が有て。大穴牟遲神と申す。甚の勝れたる神様で。御兄弟が八十柱おはしまし。始めは此の御兄弟の神々の爲に。かれこれ御難儀をなされたなれども。夜見の國に坐ます。須佐之男命の御計らひに依て。遂に其多くの御兄弟の神々を御從へなされて。則この御國を所知めし。又の御名を大國主神と申し上るも。此の御國を

知し食たる故と云ざる。御子たちも多くおはし座て。其の中にも第一が事代主神と申上て。神祇官の八神の其の御一と方と云ざる。又味相高彥根神。これは高加茂の神様と云ざる。また建御名方命と申すは。是は信濃國諏訪におはします神様で。何れも御威勢が強くおはし坐たてと云ざる。扱此の此大國主神は。御名をかす多く御持なされて。居させらるゝに依て。大名持神と申す。大名持と云が轉じて。大汝と云やうに成たもので。扱大名牟遲神は。かの八尋矛と申す。殿しき矛を御杖あそばして。少毘古那神と申す神様と。御力を御合せなされて。此の御國を御經營なされ。伊弉那岐。伊弉那美神の。なされ残しておかれたる事共は。大きに片付たてと云ざる。猶又醫藥方術の道をも。此二柱の神の御始めなされた事。是は醫道の講談の砌に申すつもりと云ざる。さて爰に天照大御神は。伊弉那岐神の御命のまにまに。天の君とまじ坐て。高皇產靈神。神皇產靈神もろ共に。天の事は申すに及ばず。天の下の事をも。至らぬ限なく。御めぐみ遊ばして入らせられ。扱仰せらるゝには。葦原の中國は。我が御子の所知食へ

き國ぢやと仰せられて。其の御子神。正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命へ。詔が有て。この御國をしらしめせと仰られたと云ざる。此天忍穗耳命と申上るは。以前。須佐之男命と。天照大御神と。玉と劍とを以て御誓なされて。世の神道者流などが。劍玉の誓と云て。例の祕事口傳を云てさわぐは此のこと。其の誓の上に御出来なされたる神様で。則高皇產靈神の御女。萬幡豊秋津師姫命の御子。玉依比賣命を御配偶と爲されて。其御生あそばしたる御子の御名を。天照岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇命と申上るでござる。かやうの訣ゆるに。此の邇々命は。天照大御神には。御正統の御孫。また高皇產靈神には。御曾孫に當らせらるゝ。それ故に。この邇邇命の御事を。皇孫命と申上る。又天孫と書たるも同じことと云ざる。扱右申すとほり。此御國は。かの御威勢の強い大穴牟遲神の。知看て入せらるゝ處へ。上もなき天照大御神。高皇產靈神の御意とは申しながらも。別段に君を御天降し遊ばさるゝに付ては。一と通りの事ではまゐらぬ訣ゆるに。天に於て。かの大祓詞。すなはち俗に謂ゆる中臣祓に

もある通り。八百萬の神等を。神集へに御つごへ遊ばし。色々御評議が有たてござる。ところが興産神と云神の御子に。思兼神と申す神がおはし坐て。是はなつく思慮の深き神で。近く申さば。御智慧の卓れなること故に。此神へ御尋ね有て。すなはち天穗日命と申すを。御下なされたてござる。この穗日命も。實は天照大御神の御子で。云はゞ堪忍すよく。御辛抱なされて。事をなし整へる。御性質の神様で有たる故に。かの御勢の強き。大穴牟遲神の。御心の和むやうに。御承知の有るやうに。かれこれ御執拵へなされる處が。三年許がほども経たざ申こととござる。是に於て。又々御評議が有て。天稚日子と申すを御下しなされて。武威を以て。大穴牟遲神の御承知なされるやうにと有たる處が。天稚彦は却つて。大穴牟遲神の御女。下照姫と申すを娶て。自分に此の國を得んと拵へ。是も八年がほども御返事を申されなだてござる。夫のみならず。天津神より。御催促の御使に遣はされたる。雉名鳴女と申すを。射殺しなんごさへ致したてござる。是に於て。又かの名たる。武甕槌男神。經津主神と申す。

武勇絶倫と類なく。勇しき神二柱を。御天降なされて。彼の穗日命の。大穴牟遲神を御和なされること。武甕槌神。經津主神の武勇にて。とうとう大穴牟遲神は御承知なされて。遂に此の國を皇孫命へ。御禪りなされることに成て。御仰せらるは。出雲國へ。天皇の大宮と同じ様に宮を造つて。我を御祭り下さるならば。其處に鎮居て。幽事と申て。世に有りとある事の。隠れて。現在の目に見えぬことどもを主宰りませう。又皇孫命は。長く此の御國を御治なされて。天の下の顯事と申て。世の中の目に見ゆることどもを。御治め遊ばせと仰せられたてござる。彼天下を御經營なされる時に。御杖あそばしたる八尋矛を。御ゆづりなされて。此の矛は我が天の下を治めたる功のある矛ゆゑに。皇孫命を以て。國を御治め遊ばしたならば。必ず安らかに治ませうと仰せられたてござる。そこで高皇產靈神。天照大御神にも。御尤に思召て。其仰せのまほりに。出雲國の多藝志の小濱と申す處へ。殿く大きく宮を御造せなされて。夫へ大國主神は。長く御鎮座あらせられたてござる。此の御宮を杵築宮と申して。則

今の出雲の大神のことでござる。又かの天穗日命は。大國主命を御和なされて。云はゞ御氣に入なれば。其の御使神と成れたてござる。すなはち今の國造と申すは。實には國のみやつこと申すべきことで。此の天穗日命の御末の。速綿と相續いたさるゝの下。中々以て一通りの家柄ではない。右の訣ゆゑ。今の現も。世の中の幽事と申て。彼の隠れて目に見えず行はるゝことは。悉く出雲の大神の御計らひなること。論なきものでござる。玉鉾百首に。「あらはにの事は。大君かみ事は。大國主の神の御こゝろ」と詠れたはこの意で。俗の諺に。十月は神々が。出雲の大神へ御寄なされるの。或は縁むすびを爲ると云ひますが。是はけしからず古くから。世間に申したことで。其れを古い學者たちが。彼此と理屈を申て。なき事にしたがるけれども。篤胤が竊に思ふには。かの天もの言はず。人をして言はしむるとかいふ類ひに。神の御心として。世にかく言觸したることで。誠に此のとほりに違ひの無いとかと思ひ合さるゝことが。今の世にも大分あるてござる。何はともあれ此の神は。世の人の殊更に能齋き奉らねばならぬ神様

で。猶この神の御徳を。人たる者は。粗略に思ひ奉るまじきことなる由は。古史傳また。玉櫛と申すもの。委しく申し置いたてござる。さて先この通りに。大穴牟遲神は御鏡り遊ばして。そこで天照大御神。高皇產靈神の御心として。いよいよ皇孫命を。此の國へ御下しなされる段に成て。天照大御神。御手に謂ゆる三種の神器。すなはち草薙の御劍。八尺瓊のまが玉。それに伊勢の五十鈴の宮に。天照大御神の御靈代と齋き奉る所の。御鏡を御捧げあそばして。運々靈命へ仰せらるゝには。豊原の水穗の國は。吾子孫のつきく所知食べき地なり。汝皇孫命行て知しめせ。又この御鏡は。我御子孫の繼い。もはら我が御靈として。我を視るが如く齋ひ祭りて。御同殿におはしませ。寶祚の隆坐んこと。天壤と無窮なるべしと。御祝言を仰せられて。又御添なされたる神々は。中臣藤原の御先祖の神。すなはち河内國枚岡に鎮り坐ます處の。天兒屋命。忌部家の御先祖。天太玉命を始めとして五柱。また別に皇孫命の御守護の神と遊ばさんが爲に。其御靈をも御添なされたる神々は。天手力雄神。是は信

州戸隠。また豊宇氣毘賣神。是は上天子様より下々までの。朝夕の食物を。飽まで安らかに給られるやうに。御守なさるゝ神様で。すなはち伊勢の外宮に鎮りまし坐が此の神様でござる。又諸の禍事の。四方四隅と申て。よもよすみより入来るを。入れじと御守りなさるゝ御門の神。すなはち門を御守りなさるゝ天石戸別神。また何によらず思慮を深くして。考へ悟ることの妙なる。天思兼神の御霊などござる。扱此やうに何れも。卓越たる神々を御供にさし添られ。天の浮橋に乗りて。かの大祓詞。すなはち俗に中臣祓と云文にも。天の八重雲を。いづの道別に道別とある通り。八重九重に。たな引きかさなる天雲を。かきわけ。天忍日命と申す神が。天の石鞆と云を御背負なされて。太刀を佩き。又天の梶弓といふ弓を御持なされ。天の眞鹿兒矢と云御矢をたばさみ。皇孫命の御前に御立なされて。御天降なされたでござる。扱その御天降なされた處が。日向國高千穂峯で。此時第一に御出迎なされた此國の神が。猿田彦大神でござる。此御下なされたる時に。空が暗くて。物の色目も分らなんだと申すこ

とで。そこで稻穂を粗となして。四方へ御投散なされたる所が。空も晴たと云ことで。此山のこと。今は霧山とも霧島山とも云て。西の峯は。大隅國鹿嶋郡。東の峯は。日向國諸縣郡で。此山の不思議なる事ども多く。其の中に。今も神代の由縁に因て。自然生の稻のはえると申し。又時として。霧の深く立つことが有ると云でござる。所を神代の古實と申て。謂ゆる先達の者が人に教へて。手毎に稻穂を持せ行て。若この霧が起る時は。其を以て拂ながら行けば。暫が間に天晴て。事故なく登られると申すことござる。

扱この御天降りの時に。御乗なされたと有る。天の浮橋といふは。天と地との間を往來する物で。空にかぶ物ゆるゑに浮橋と云ふ。此世なる物では。船と同様の物。それ故に。天の磐船とも申すでござる。始め伊邪那岐伊邪那美神の。天の浮橋に御立なされ。沼矛を以て。國を御探なされたとあるも同物でござる。扱このうきはしに乘には。高き處よりのことと見えて。今國々に在る梯立と云は。其料に神の御造なされたる物の遺跡と思はれる。其れは先播磨國

の風土記に。賀古郡益氣の里と云處に。此の梯立のとあり。又丹後國の風土記にも。與謝郡速石の里といふ處の海に。橋立と云ものあり。是はけしからず大きいことで。長が貳千貳百貳拾九丈。廣さが九丈拾丈。もつと廣い處は。貳拾丈ぐらゐの處もあると記てあるで。是は今の世の人にもよく知て。見に行ものも大ぶある。篤胤が知た人にも。見て來た者も數人有て。何れも恐入て。とかく強言をしたがる者も。我折て居でござる。抑此浮橋の往來は。伊邪那岐伊邪那美二柱神の。大そらを乘るために。御造りなされたるが始めにて。此後は。ほかの神々の御往來も必有たるべく尤其中に。天照大御神を天へ御送上なさるゝ時は。天之御柱を以て。御上なされた有れば。此れは別物なる上に。この頃までは。天地相去未遠とも有て。近く容易く聞ゆるなれども。今皇孫邇々壽命の。浮橋に乗て御天降なさるゝ趣は。八重雲を。稜威のちわきにちわきなど有て。其さま以前よりは。殊の外遠きやうに聞ゆるでござる。扱この御降なされて後。ますく天日は上へ相遠さかるに依て。此の浮橋の往來も止み。其梯ども。

終には地に伏したるが。即今。播磨や丹後國にあるのじやと云でござる。斯くて天日は上へ上つて。大虚空の真中に。しゃんと位を定めて。外へは動くことなく。一處に在て。右旋りに。くるくると旋て有る。これ天つ日の有状也。扱又大地は。其の天日の中として。其より遙に遠き大空を。右めぐりに漂ひ行て。大周り一周する。これ一年なり但し此大周の間に。自己の旋轉ありて。天日に向ふ時は晝をなし。背向るをりは夜となる。此一旋轉を一日と云ふ。かくの如くに旋轉すること。三百六十餘轉する間に。大空を行き。天日を大周して。又本の處にかへる。是を一年と云ふ。扱また夜見の國も。此みざりに斷離れて月と見え。大地の外を周行して。盈虚を爲し。二十九日半餘にして。本の處に復る。是を一月と云ふ。これすなはち。天日。大地。月夜見の。今の如く成整ひたるの大略でござる。此事を近く譬へて申さば。服部中庸が申たるとほり。兒の臍帯と胞衣と續きたるが如く。又木草の果が熟すれば。帯おちのするやうなもので。是只に其狀の似たるばかりで無く。其の道理迄が全く同じことで。なせと

申すに。皇孫命の。天より御降なされたるは。兒の
 生出たるやうな物で。又伊邪那岐伊邪那美二柱の大
 神の。御生なされて。日の神の御生れなされたる。
 此の御國の君の御定り遊ばして。御天降なされて。御
 御治めあそばすは。天地國土の事の。全く成就した
 る所で。是草木の果の生て熟したると。全く同じ道
 理でござる。又其の始め一の物より。天と崩上りた
 る砌は。正しく天と上下相對する處が御國なる故に。
 即御國の在處は。此の大地の頂上なることが知れるで
 ざる。又諸の外國の初は。古傳説に。處々の小島は。
 皆是湖沫凝成者矣。とあるに依て考ふるに。伊
 邪那岐伊邪那美二柱の神。大八島國を御生なされ
 て。國土と海水と。漸々に分れるに隨て。こゝかし
 こと。湖の沫の自らに凝固まりて。泥土のより聚て
 大きくも小くも國と成たもので。御國に比へては。
 遙に後れて成たることをも知が宜いでござる。是も
 皆皇産靈神の。むすびの御徳に依て出来ることは。
 異り無れども。外國どもは。二柱の神の御産なされ
 るに非ず。又日の神の御本國でないに依て。御國と
 は初より。尊卑美惡の差別も。爰でよく分るでござ

る。是を思ふにも。皇國はこれ天地の根蒂で。諸の
 事物。悉く萬國に優れてをる所以も。又諸の外國と
 もの。何もかも皇國に劣るべきことをも。考へ知る
 が宜いでござる。又此の訣ゆるに。諸の外國ども
 に。偶のこれる古傳説も。御國の如く。詳には傳
 らぬはずのことで。是は譬へば。京に有たる事を。
 國々の鄙に語りつたへたやうなもので。本の京はど
 に慥ならぬも。尤なとでござる。又御國の古傳説の
 片はしを。訛りながらに云ひ傳へて。其の國の如く
 申て居るのは。是も都にて有たる事を。遠き鄙に聞
 傳へて。年久しくなる儘に。本をば失ひ。其處にて
 有たるとの如くに。語傳へたるやうなもので。とツ
 くりと此等の訣を考へて。御國の天子様は。實に四
 海萬國を知し食べき。眞の天子と御座ますこと著明
 く。尊しなんぞ申し奉るも。中々よの常のことでは
 無いでござる。然るを世の學者等が。ひたすら外國
 の説にのみ惑ひ溺れて。御國のかばかり尊き御事を
 知りませす。偶に此やうの眞説を聞いても。信する
 こと能はず。却ていひ破らうとせ。致すは。返すく
 心得違ひなることとでござる。又世間の。外國びいき

の學者どもの能くいふことには。我國は小國で。又
 國の開けも遅かつたなどよく申すが。先御國を。
 小國々々と云て。貶さうとするけれども。國ばかり
 でもなく。凡て物の尊いと卑いと。美と惡とは。
 形の大小によるものではない。數丈の大石も方寸の
 玉に如す。又牛馬象など云類の獸は。大きいけれど
 も人にしかず。何ほど廣大なる國じやと申ても。下
 國は下國。狭く小くても上國は上國で。近く萬國の
 圖と云ものを見るに。オロシヤ。アメリカなど云。
 殊の外大きな國が數々有て。中には草木も生せず。
 人物もない處があるが。それでも是を上國と云うか。
 夫迄もなく。近く御國の内ですへ。上中下と分て有
 るけれども。それは國の大小を以て。御定めなされ
 たことでは無く。國の産物一體の風土を以て。上國
 下國の差別は立たものでござる。又御國の開けの遅
 いと云は。智慧づきの晩かつたことと云て講るので。實
 は思慮の至らぬのでござる。其の故は。御國は萬國
 の祖國本國じやに依て。自ら地氣厚く。申さば大智
 大器量の人の。智慧の開けの晩いやうなもので。是
 は譬へば。摠見院の右大臣織田信長公などは。二十歳

を越されるまでは。一向おだしく拙くて。人はみな
 馬鹿殿と申たと云こと。又大石内藏助良雄なども。
 天地と共に美名を傳ふる程の人なれども。是以て二
 十歳ばかりまでも。人は馬鹿だと申たこと。か
 やうの類が。昔の器量人にはしたゝか有る。又鳥獸
 などは。生れて直に。米や虫を啄て食つたり。又生
 れてやうく。二月三月も立やいな。雌雄交合を爲
 たり何かするも。皆賤き物なるが故で。其から見れ
 ば。人はけしからず。何もかも蜂のあかぬものでご
 ざる。是が直に人の鳥獸よりは尊い所で。外國の早
 くわる賢く成たるも。御國の久しく神代の有様で。
 わるがしこく無かつたのも。是に準へて考へるが宜
 いでござる。唐國の老子と云書にも。大器は晩成と
 云てある。此意は。右申たる大量大智の人や。又は
 鳥獸に比へては。智慧づきの遅いやうなことを申た
 もので。是は唐人ながら能云あてたこととでござる。
 是は思ひ付たから申すが。御國は右に段々申す通り。
 天地の根蒂で。近く草木の果で。譬は蒂の處じやに
 依て。ちやうど彼瓜や桃の果などの。其のやうやく
 に大く成のは。蒂の處より。頭の方へ育つたれども。

其ぞだち上つた上で熟するには。成收つたる末の方から熟して来て。熟の所はいッち後に熟するもので。こりや熟の處は。成初むる本の處じやに仍て。氣が厚い故で。とんと本草の果の生て熟するも。人が生れる訣なども同じこと。天地の出来初めの状。更に異りは無いでござる。但し此やうに委く申ても。領解の行かぬ人は。やはり領解ゆかず。ほかんとして居るものじやが。段々演説を遂てきかれた上で。彼此を思ひ合せ。發明することが出来て。其時は。篤胤がぐとく言ぐらゐることでは無く。筆で書うとするに。彼唐人も申したる。書は言を盡さずとか云やうに。書取られず。然らば口に言んとするに。彼の言は意を盡さずとか云やうに。口に餘つていひ解れず。其ではかの。手の舞ひ足の踏ことを知らずとか云やうに。小踊りする程。心ちよきことの有るもので。篤胤が演説ぐらゐるは。坐睡ながらにも云はれることとござる。但し何によらず。外國で仕出したる事物が。御國へ渡つてくると其れをもちと見て。其の上を遙に卓絶て。其事の出来ることも。又御國人の勝れたる所で。それは此の篤胤が致ても。彼よ

りは屹とよく出来る。是が御國の風土の自然で。自然と申すは。神の御國なる故とござる。是らのことに付ても。細やかに考へたことも有りませんが。夫は醫道の演説のついでに申すつもりでござる。扱皇孫邇々藝命は。まづ筑紫の日向之高千穂の峯に。御天降遊ばして。大宮所と成べき處を御尋ねなされ。吾田の笠狭の御所なる。長屋之竹島と申す處を都となされて。天の下を所知食たでござる。是に於て國津神たち。何れも。何れも。皇孫命を。天つ神の御子と申て。畏み仕へ奉られ。是より致て世々の天皇を。天津神の御子と申す事に成たでござる。右の訣故に。天子と唱へ申すは字音にて。元より漢語なれども。此の天つ神の御子と申上る御稱に。よく叶つてゐる言で。實に天子と稱すべきは。我天皇に限るとで。夫に付て諸越の王を。天子と云ふことの當らぬわけは。漢學の大意に論辨いたすつもりでござる。扱邇々藝命は。笠狭の御所なる竹島に御座なされて。天の下を知しめし。大山津見神の御女。木花開耶姬命と申す神を御迎なされて。御生せ遊ばしたるが。天津日高日子穗々手見命と申上る。此日子穗々手見

命がわけあつて海つみの宮と申て。則海宮へ御出なされて。其の綿津見神の御女。豊玉姫命と申す神を御娶遊ばし。御生せなされたるが。日子波限建鷦草葺不合命と申上る。扱其葺不合命も。同わたつみの神の弟女。玉依姫命と申す神を。御娶遊ばして。御生せなされたるが。神倭伊波禮比古命と申上る。此御方の御代に。日向國笠狭の御所より。大和國へ都を御遷しなされて。かの長髓彦など云を御誅罰あそばし。是が俗にも能知てをる。神武天皇様でござる。但し神武天皇と申上るは。實の御名ではない。實の御名は。右に申たる。神倭伊波禮比古命で。夫へはるか千年許も後の世に。漢風の御諡號を奉て。神武天皇と申上たものでござる。扱こゝで申さねばならぬ事がある。其れは俗の學者の説。及び世の常の人も治く申すに。天神七代。地神五代。人王何十代など云ことを申すが。是は其初。何なるをこの者の言出たることか。甚の誤りで。曾て當らぬこととござる。夫はまづ古事記にも日本紀にも。國之常立神以下。伊邪那岐伊邪那美神までを。是を神世七代と申す由は見えたれども。此れを天神と申すこと

は見えませぬ。是はさう有べきことは。國之常立神以下。伊邪那岐伊邪那美神まで。七代の神等は。皆此の國土に付て御生あそばしたるに故に。天つ神と申すべき謂はないでござる。天地最初に。早くより天に御座なされたる。天之御中主神。次に高皇產靈神。神皇產靈神。次に宇麻志阿斯阿備比古遲神。天之常立神。この五柱の神々を。古事記に別て。天つ神と記されたるによつて。夫れより以下。國之常立神よりこなた。伊邪那岐伊邪那美神までは。天神と申さぬことは明か。然れども又正しく是を。國つ神と稱したことも物に見えず。一體國津神と申すは。邇邇藝命より後の御代に至て。此の國なる神を。天つ神に對する時に申す稱でござる。又天照大御神より。葺不合命までを。地神五代と申も。太じき非説で。其故は天照大御神は。此の國土には御生れあそばしたなれども。御父神。伊邪那岐大神の御心として。天を所知食さしめ。今もまのあたり拜奉る。其天日を知しめす神におはし坐せば。天つ神なること論はなく。其の御子忍穗耳の命も。其御孫邇々藝命も。天に御生れあそばしたることゆるに。是は本より天

つ神でござる。じやに仍て邇々藝命が。此の御國へ御天降り遊ばして御代しろしめし。其の御子穗々手見命より。御子孫の次々を。天つ神の御子と申すでござる。但し穗々手見命。鶉草葺不合命は。此國に御生れなされた故に。天つ神とは申さず。然れども又是を。地つ神と申たことも。更に物に見えず。其はなせなれば。此の國土には御生れ遊ばしたなれども。天つ神の御正統に坐ますが故に。皇孫命とも。又漢文にかく時は。天孫とも申すでござる。此訣じやものを。どう致して天照大御神や。忍穂耳命。また邇々藝命を。地神と申すべき由縁が有りませうぞ。凡て天神七代。地神五代と申す事は。古書に曾て見えず。忌部正通の。神代卷口訣と申す物に。始めて見えたなれども。是は事の意をも。古へをも考へず。強て天と地とに當やうとて。漫りに言出したる。後の世の俗説でござる。然るを世の學者ども。さやうの辨も無く。賢げに天七地五など云ひ。又は神武天皇以下を。人王とか申て。則天地人の三元に象るなど云ひ。又天を所知食を。天神と申すなど云ひ。或は此の七代五代を。天の七星。地の五行に象ると

云ひ。又は易の八卦に配當して説なんども爲なれども。凡て近き世の漢意の輩の私説で。皆取られぬこといもでござる。又佛説すきなる者は。此の七代を過去の七佛に形ざるのなんのと申すが。かやうの類は。耳に觸きくも汚はしく。片腹いたく。實には甚恐多き御事でござる。さてまた神代と申すことは。人の代と別て申す稱で。夫はいと上つ代の人。凡て皆神で有たる故に。其代をさして。神代と云た物で。扱いつ頃までの人は神で。何頃からこなたの人は。神でない云ふ。際やかなる差別はないに仍て。萬葉の歌などもなにも。唯古へを廣く神代と申たもので。其は萬葉集の六の卷に。大和の國は皇祖の。神の御代より敷坐る。國にし有れば。と詠たのは。神武天皇の御代を申し。又十八の卷に。すめろぎの神の大御代と詠たのは。垂仁天皇の御代を申し。又一の卷には。其御代をも稱奉りて。神の御代と詠である。猶此外にも。廣く古へを神代と申たる例は種々有る。然れ共事を分て云時は。鶉草葺不合の命迄を神代といたし。神武天皇より以下を。人代と致す。日本紀にも此意を以て。葺不合命まで二卷

を。神代上下と標されたもので。何さまにも。神倭伊波禮彥命。すなはち神武天皇の御代に。始めて日向國笠狭の御碕より。大和國へ都を御移しあそばし。世の中の有状も。どんと新に成たる故に。是より後を。人の代とも云べきもので御坐る。然れども今を以て是を思へば。神武天皇の大御代より。其後もなほ暫の御代々々。またく其世の人は。神なる事どもが有て。やツぱり神代と云べき有様で。夫から段段年立ち。御代の替るに隨て。今の姿に成たてで御座る。扱かやうに凡人と成果たる。今の心を以て思へば。いかう神世の人の。神なる所業が。あやしく。疑はしく思はれるなれ共。更に疑べきとでは無い。其を世の學者どもが。今の凡人の心を以て古へを考へ。かれこれ異國の説を取合せて。古への神の。奇妙々々。くすしく妙なりし事實を説まげ。それを強て。奇くも無さまに。狂説どもを吐散し。説ちらして書に記し。世に弘めたることゆる。世の人もそれを見たり聞たりして。心にしみ込み。神代のごとは。皆寓言と申して。作り事じやと思ふやうに成てしまつたで御座る。彼の神道者流。又は世の常の學

者等の云ふとほりのことでは。神代の神々は。やはり今の凡人と同じとて。其奇しく異しく。神なる事の有たと云を。皆寓言の作りこととして見る時は。今の人間に異りも無れば。さして神と云べき物でも無く。又有がたいこともないと申すものでござる。さすれば其代を指て。神代と云べき謂もなく。又御國を殊更に。神國と云べき筋も無く。また御國の人に限て。神の御末じやと。我だけく云がものでも无でござる。凡て世間の生殺意な輩は。とかく神代の神々の。奇靈なる御所業を信せず。漢風の小智を振て。かしこげに彼此と申けれども。こりや夏虫の見と申て。夏に成て生じたる虫が。氷を疑ふやうなもので。扱々身の程を知らぬ愚なこと。今それらを論がてら。天地を御始めなされた。靈妙と云て。靈く妙なりし神々の御末が。世を経年を重ねる儘に段々。かの靈妙なるとの遠ざかりて。斯の如く靈いことも何も无き。今の凡人と成て。數十代を累ねたる所を。至て近きことを譬として。申さうならば。先その家を興し始めた先祖が。ちやうどかの。釋迦が嶽とか。谷風とか云た相撲取のやうに。大男で。

せいの高さが。七尺有餘八尺も有て。肩の廣さが三尺餘も有り。其の手をひろげると。半紙のかみの外へ出る。又その履が。やがて二尺もある。其の力量と云へば。居風呂桶と云て。四五尺許の角をおとしたる物へ。水を一杯にはり溜て。其母なる者の。其中にはいつて居たるを。輕々と持はこび。又四斗俵を拍子木に打て見せ。扱食物は三四升の飯。尤も菜の物をたんと添て。足らぬげに食つてしまひ。夫に應じて。著物も殊に大きく。家も殊の外大く廣く。屋の棟の高さが。五六間もあり。何もかも是に準して大造で有た時に。それが生た子はよほ劣て。せいの高さが一尺も低い。夫に進じて何もかも。親よりは劣て居る。又それが生た子は。又一ときさみ劣て居る。其次も又よほ劣り。年を経代々を重ねる中に。段々劣てきて。つひく彼の小人島の人と云やうに。扇子だけに成て。是から後は。とんと其姿に成すわつて。夫が大分ふえたで。是が神代から段々。今の世の如く成替たことの譬でござる。扱此の一寸ぼうしの代々に成ての後に。彼先祖の事どもを委く記した一巻が傳つてゐる。是が神代の事實を御傳へ。御記

なされたる。古事記。日本紀などの譬でござる。夫をかの一寸ぼうしの代に成て。讀で見たる所が。彼先祖の大男の。せいの高さが七尺餘も有て。四斗俵を拍子木に打たる事などが記てある。爰で彼の一寸ぼうし等が大きに魂消て。いや是はけしからぬ事じや。此方の親も祖父も。やつはり我らと同様で有たものを。夫にかやうの事が書てあると云は。いかに先祖じやとて。さう大きからうはずは無く。こんな力の有うはずもない。是は信じられぬとじや。是は先祖と云ものだから。尊く思はせんが爲に。寓言の作りごとをして。中頃に書て置た物で有らう。と云てゐるでござる。是が世の人の神代の事實を。今の凡人の上に按て見て。信せず疑ふの譬でござる。所が其の同じ一寸ぼうしものの中に。一人が頭を振て。いやさうでない。疑べきことでない。其訣は今も現在に。其の先祖の手の跡を寫さしたる紙が傳つてゐる。又其著て居られた衣服も傳つてゐる。熟それを見るに。著ふるしたる垢付の様子と云ひ又手の跡を寫されたと云紙なども手の筋のうづり。指の卷きめの跡と云ひ。中々以て後に偽作た物とは

見えず。疑はしき物ではなく。誠に先祖の著もの。手のひらの跡を寫されたるに違ない。夫のみならず。此の家を始め興す程の先祖じやもの。又我らが住つて居る家も。つらく見さつしやれ。實に大きな物ではないか。決して此方ども。扇子だけしかない者等の。手きはに成ることではないから。先祖は實に此記である如く。夫から劣てきて。つひく此方。お互のやうに成居つたものと見えるから。能考へて。かれこれ先祖のことを怪むべきことでは元と。細やかに言さかす。此一人の一寸ぼうしと云は。古の道を論さうとする縣居の大人。本居先生などの譬。その手の平の跡を寫した紙や。著物の残たるなどは。神代の遺物。天の梯立じやの。又は草薙の御劍の類。その餘も今の世に遺て。其儘ある物の譬へ。家の大きい所を言論すのは。此の天地の大きく奇く。其を御造あそばすほどの神じやものと云て。此方が論のたとへでござる。扱斯の如く。一人の一寸ぼうしが論ても。外の一寸ぼうし等は。今の己らが。何もかも先祖とは。いかう違て居ることばかり。目が付き心が引れて。先祖の大男で。右の如く力も有た

ることを。一向に寓言として。更に肯がはず。猶かれこれと云たならば。なんと是はごちらが尤て有ませう。神世の神の御上の事を疑ふも。こんなもので。天地を御始めなされたる程の。皇大御祖神たちの。奇靈なる御所爲を。あなかしこく。努々疑ひ奉るべきことでは無いでござる。猶此等のことは。師の翁も。いろく論し置れたでござる。扱神倭伊波禮彥命。すなはち神武天皇は。大和國橿原宮と申すにおはし坐て。天の下を御治あそばし。此天皇様より當今様まで。御血脈が連綿と御續あそばし。百二十代と申すまで動きなく。御榮え遊すと申すは。實に此の大地に有りとある國々に。比類なく有がたい御國で。是が實に道の大本で唐などとは。さんと訣の違てゐるとで。なんと天地初發の時に。其天地を御造なされたる神々の。世に殊なる思召で。厚く御心を入させられて。神の御生なされ。又其の御末として。世に殊なる御威勢のおはしましたる。大穴牟遲神。少彦名神の御經營あそばして。扱四海萬國生としける物。鳥獸草木に至るまで。其の御蔭に泄ると云となき。天津日すなはち日輪の萌上つたる本

の御國で。其天つ日を所知食て。天地の有ん限りに。世を御めくみ遊ばす日の神。天照大御神の御生國で。高皇產靈神の御會孫。天照大御神の御孫にましく。殊更に此二柱の神の。御愛み御恵みあそばさるる。通々壽命へ天に坐ませる神々の。殊に卓絶たるばかりを。右二柱の大御神の。御目鑿を以て御撰びなされ。御附屬あそばし。又天照大御神の。殊に大切と御齋遊ばさる。三種の神器を。天子の御璽として御授あそばし。又御口づから。豊葦原の水穂の國は。我が御子孫の次をに知し召て。天地と共に無窮なるへま國ぞ。御祝言を仰せられたる。其神勅空しからず。皇孫遊を壽命より。當今様まで。唯一日の如く。御代を知し食て。其御附屬なされたる神々の御子孫とて。今以て其如く。連綿と御續きなされて。其末々が世にひろがり。又世々の天子様の御末の御子だちへの。平氏や源氏などを下されて。臣下の列にもなされたるが。其末の末がふえ弘がつて。つひく御互の上と成たる物で。なんと此の歌じやものを。御國は誠の神國であるまいか。なんとおたがひは。誠は神の御末では有るまいか。今はかやうに零落て。

其先祖の神も慥ならぬやうなれども。御國の人には各々氏姓と云が有て。其は元來天子様より賜たる物で。近くは源平藤橘など云て。源とか平とか橘とか。藤原とか云ものが是でござる。其を以て古へを穿鑿すると。大きに知れる。又其姓をも覺えぬと云人は。今名のつてある。平田とか何とか云ふ類ひのもの。是を系圖の學問と申して。又一派立てるでござる。其人は知らずに居るのも。名字を聞けば。こりや何と申す神。何と申し上たる天子様から。出たる人じやといふことは。此方には自分の事無くて。あらは暗にも知れるでござる。抑かくの通り。古傳説の事實に依て能明らめ。又世の營みの忙しくて。己が手に明らめることのならぬ方は。導く人の話でも聞覚えられて。扱其上でおし張て我が國は神國じやと。我らは神の御末じやとも。爰では氣強く云へるでござる。さう無くては。若人になせ其許は。御國に限つて神國じやの。又神の御末じやのと。大きなと云ふぞと答められたならば。きつくりするで有うと。篤胤は按じられるで。

又さう答められた所で。此くらゐに粗々も心得て居たことを以て。答を付たならば。彼のおたがひに賤める唐人すら。是は先會の日に申たることながら。其先祖の美を論撰めて。明かに後の世に著すものじや。其の先祖が善有ても知らぬと云は。不明と云て。道理に味いと云ものじや。知て傳へざるは不仁と云て。先祖へ不實不孝と云ものじやと云たにも。恥かしく無いと云ふものでござる。扱此のとほり神の御末。神の御本國じやに依て。この御國は。萬の外國ごもとは天地懸隔で。何もかも不足なごとはなく。満足で美しく。第一に命をつなぐ米穀が。萬國隨一に結構で。此の結構なる風土水土の國に生れて。結構なる五穀を。豊受姫命。すなはち伊勢の外宮の神様の。厚き御徳に仍て。飽までに食てをる故に。御國に生れる人は。本の種と云ひ。さんと外國の人とは。同じ年にもいはれぬ程。武づよく聰明に。殊れて居るでござる。但しかやうに。古傳説の事實を以て考へ正し。誠のことを申ても。外國の學びに惑つてある人や。又生さかしらな人は。何もかもよく。御國がよいくと平田は云ふが。あ

りやけつく。最負の引介ではないか。など云も有うか。さやうの人には。此國の本説で申て聞かせても。猶かれこれと云ものだから。其らには。天文地理及び外國の説を以て。御國の萬國に優れてをると云は。此天地の間の公論なることを。示さうと存するでござる。是は此次の會のことにいたしませう。我が鈴の屋の翁が詠れたる歌に「あやしきはこれの天地うへな」。神代は殊にあやしき有けん。と詠れましたが。これのと云は。このと云と同じこと。又うへなくと云ふは。言篇に若と云字を書いた。諸の字の義の詞で。俗に申さば。なるほどか。げにくと云詞の意で。一首の意は。世に靈き物と云は此天地じや。然れば其あやしき天地の。今初まると云神代のことなれば。又殊に奇々妙々なることが。多く有たであらう。げに理りじやと云ふの意でござる。あやしき有けんは。俗に云は。靈かつたで有うと云の意で。扱かやうに詠れたるは。世の人の。神代の種々のあやしき事ごも。有るまじきこと。異み思つて疑ふ故。さやうに疑ふは。却て恐なることじやと云意を。論し詠れたもので。扱此あやしと

も靈しく。奇々妙々なる天地の始りの有状。又天地と分れたる大抵の趣は。先の二會に。神代の古傳説に原いて。粗々演説いたしたる通のこと。一體この大地は。先會に申すとほり。其初め浮雲の如くで。其状ひ難く。大虚空の中に漂つて。係る所はなく。譬へば。一つの球をつき上たるやうにて。何ともあやしく。奇々妙々なることで。是に準へて思ふにも。彼の天の浮橋を。天地の間に浮めて自由をなしたるなどは。更に疑しきことでは無く。思合せて悟られることとござる。抑々天は動かす。地の動き旋るといふことは。外國の説を借るに及ばず。本より御國の古傳にて明かなることなれども。天文地理のことに付ては。西洋人の考へたる説が。第一に委く。誰が聞ても分り易きことゆゑに。今は其の説に因て云ことじや。扱其の大地の形はまん丸な物で。近くは古者などの持て居るものに。鞠の如く丸く拵へて。夫へ國々をもち付て。其外へは。種々の輪を回したる物がある。あれは渾天儀と云物で。彼まん丸くして。國をもち付たが。此大地の有状で。丸き物ゆゑに。地球とも名けたもので。則地球の球

の字はまりと申す字でござる。扱その大地球のぐるりが。海と國とで。近く申せば。其くばい處へは水が溜つて。則海と川とに成り。また高い處は國で。中にもひよつくりと。もぬけて高い處が山と覺えさへすれば。遠ひないことで。諺に六海三山一平地と申て。此の大地のぐるりが。六分程は海。三分は山。一つは平地じやと申すこととござる。又或は海と陸と。相半してゐると云説も有るで。扱其の大地球に有る國を。五つに分て。第一をアジヤと云ひ。第二をエウロツバと云。第三をアメリカといひ。第四を南アメリカと云ひ。第五を北アメリカと云ふ。凡て是を五つの大國といひ。又是を以て五大洲とも申すこととござる。御國もろこし。樺羅。天竺などは。此第一のあじやと號けたる大國の内。さすれば。御國から樺羅天竺などを合せたる程の國が。また四つ有りも。まだ海と成てゐる處は多いから。なんぞめつぼうかいに大きな物では無かな。夫程に大きな物が。此大空の中に浮漂してゐて。落もせず。上りもせず居ることを。どうして考へ知たものじやと

申すに。右に申したるエウロツバ。則第二に當る國の人々は。自由自在に。此の大地球のぐるりを船で乗回し。國と云ふ國の限り行ぬ處なく。其エウロツバの中にも。小國なれども。阿蘭陀と云ふ國は。其萬國を。自由自在に乗渡らうとするに付ては。天文地理に委しく無てはならぬ事ゆゑに。是を第一の學びとしたものでござる。其上けしからず。氣を長く物を考へる國風で。底の底まで物を考へる。其考への爲とて。種々測量の道具を拵へ。譬へば日月星の有形などを見んとては。望遠鏡。遮日鏡を拵へ。又其の大きさ遠さ近さを知んとては。量地などの道具を考へ。夫をするにも。五年十年。乃至一生もかかり。一代に考へ課せぬことは。自分の考へたる處までを嘗て。其後を。又子孫や弟子の者が。幾代もく係て考へつけ。扱その器を以て是非に考へ付やうとするでござる。然れども殊勝な國で。唐などのやうに。推量の上すべりなことは云はぬ。それ故に。どうして考へても知れぬ事は。こりや人間の上では知れぬ事じや。造物主と云て。天つ神の御所業で無ては。測れぬと云て。とんとおし推量なことは

云はぬでござる。其通にして。千年二千年の間。數百人の人々が。考に考へて。煎じ詰たる説どもが。書物にして。此御國へも貢ぎ奉て有る故に。其を見て今かやうに申のでござる。扱此大地が丸い物で。中に浮てゐるに相違なき證據には。船で東へ東へと乗て行くと西へ出る。是に於て。圓體と云説が助かぬこととござる。然れば其通り丸い物なれば。いづこを上とも下とも。言難きやうなれども。此丸く見える大虚空に。北極南極と申て。とんと動かぬ處がある。是は譬へば。車に樞軸のある如く。又磨に磨の有るやうなもので。此外は星も何も周旋れども。是はめぐらす。夫故に極と名けたもので。極はきはまると云ふ字で。此の北極南極と云を。中真に取て上下を定め。三百六十に割をする。但し少餘りが出る。さて其の三百六十餘を。又この大地へも割付て。其一つを一度と云ふ。一度の廣さが。御國の里數で。大抵三十里ほどに當る。天地の度數と云は此の事とござる。此度數の當りやうで。寒國と熱國とが分り。夫に依て國の善惡も定る。御國は此の天地の度數にあて、云へば。ちやうど三十度から。四十度までの

間に當る。是は三百六十度の内では。一ばんに好き風土で。御國の四時の氣候が中正で。結構なは此故でござる。扱一度を三十里として積れば。此の大地の周圍が一萬八百里あり。又めぐりが一萬八百里有れば。其差わたしが大凡其の三分一ほど有るもの故に。是は三千四百四十里ばかりも有らうと云ものでござる。扱この天文説の。御國へ傳はつて。是を初めて世に弘めたるが。長崎の西川求林齋と云人で。是は元祿前後の人で。此の以前は。天文地理萬國の事なども一向不分で。しどけなかつた所を。かの誰も知てをる。天經或問と云書を板に開し。また華夷通商考と云ふ。萬國の風俗などを擧たる書を作て。是も世に弘め。此外にも色々著述がある。是からして世の人も。萬國の事を。あらくも知るやうに成たでござる。此人しほらしくも。御國魂の有た人で。其西洋の天文地理の説。及び唐の説に因て。日本水土考と云ふ書物。一卷を著したでござる。それに云ふことには。

不以自國爲上國而用自國之說。斷自國之美。者。未脱有私稱之偏。故今從異邦之所圖。以察此國之美。則非私稱之儀。而實知此國爲上國之理矣。於茲。吾日本水土考。以示同學。苟雖以此儀。談於異邦人。豈得拒之哉。是は序の趣でござる。扱本文の趣を。かい摘んで申さば。

我國之形勢。東西長。南北狹。少反曲而有淤龍遶首之貌也。國有萬國之東頭。而朝陽始照之地。陽氣發生之最初也。號日本者。其義最相當也。此國爲神國之義。水土自然之理乎。史記云東北神明之舍。日本者清陽中正之水土也。故神明會于此。最不可疑焉。

此國。四時中正之國也。雖萬國廣大四時中正。如我國者不多焉。總在南北四十七度之間。者。皆偏熱國也。或去中帶。凡六十度以上之地者。皆偏寒國也。唯去中帶。自二十七度至四十二度之間。爲之四時正氣國也。日本中央之京畿。去中帶三十度。其東邊三十八九度。其西邊三十一二度。是四時正和之水土也。

日本比之。天竺辰旦。則雖謂小。然國者不可不以廣大爲貴。以四時之正偏。人物之美惡。而可定其貴賤。是故國土極大者。其人情風俗多岐而難一統。辰旦之王統。變亂而難久。日本之限度。不廣亦非狹。其人事風俗民情。相齊混一而易治。是故日本皇統。自開闢至今。而無變者。萬國中惟日本而已。是亦非水土之神妙耶。

日本國。要害勝於萬國者也。蓋小國。干大國者。必有爲大國所併。或終爲大國所併焉。日本之地。雖近於大國。隔濰海。而如相遠。故無被風於大國之患。況其所併乎。辰旦之大國。被苦北狄之強大者。其地相連。故也。況小國耶。然則日本風水要害之好。萬國最上也。住乎浦安之大城。備乎千矛之武德。而永久與天地無窮矣。此民者神明之孫裔。而此道者神明之遺訓也。愛清淨潔白。樂質素朴實者。則仁勇之道。而智自足也。是此國自然神德也。豈不貴哉。

さて先刻申すとほり。五大州の内。第二に當る。は。此の諸國の沃地は。此の大地のぐるりを。自

在に乗回して。萬國の事體を。よつく見たり聞いた尋ねたりして。其國々の風俗產物人氣。また土地がらの事までを。とつくりと考へて。かの族の非だちや。蚯蚓を見たやうな阿蘭陀文字で。委しく記したる書物がいろく有て。其を御國の詞に翻譯して。萬國の有様を。一目に見えるやうにしたるものが。山村才助昌永の。増譯采覽異言と申して十二卷。尤國々の圖も附てゐる。是は一體新井筑後守白石先生の采覽異言と云書を。増補いたしたるもの。實は公儀の御息の挂つて出來たる物で。萬國の事を知るには實に此位のものありや致さんでござる。但し是には御國のことが洩てゐる。其の故は我國の事で。誰も知たること故に外國人の評議を聞まではない。と云ふの心と見えるでござる。是は實に尤なこと。さう有べきはず。又我國の事じやに依て誰も知て居さうな物じやがやつぱり知らぬ人が多い。是は常の人ばかりでなく學者と叫ぶる人が。大抵はかやうなもの。却て御國の結構なるを卑め貶し外國をよいと心得て居ると云ふは。あはれなことで。譬は常に米の飯を飽きてに食て居る人は。其に御國何とも思はず。

常に麥飯や。稗の飯ばかりを食てゐる人々を。羨しがるやうなもので初その遙西の國より。渡したる書物の内に。ペンケルイヒンギンヤツパン。と云書がある。是を此方の言に直して見ると。日本志と云ふことになる。是はエンゲルベルルトケンフル。と云者の記したる書物で。此の人は萬國の事を委く知らうか爲に。この國を云々なく渡つてゐる。御國の事をも吟味しやうが爲に阿蘭陀船のカヒタンと云役人と成て正徳時分に御國へも参り。京も江戸も見て。かの萬國の風土記を作て。萬國に名を知られ。後世へ夫で名を揚げやうと思ふ心から爲たること故に。それはく精密なることで。是は外國と云ふ中にも。けしからず遠き國で何も御國に限て最負いたさうはずも無し。何のこともなく。萬國をあるいて見た所が。天地の間に。御國ほど結構なる國は無いから。其の事を。有の儘に記したと見えるでござる。我が翁の歌に「天地のそきへのきはみまぎぬとも御國にましてよき國あらめや」と詠れたが。實以てそれに違のないとは。其の書物で能わかる。其書物の趣をかいつまんで申さば。まづ御國を難する人

の有る體に筆を起て云には。日本人がちゃんど。錠でもおろしたやうに。諸の外國と商ひを通せず。其國の人をば外國へ出さず。又外國から。どうぞ交はりたい。交易がしたいと云て願ても。取上ぬは。さうしたることじやと云に。一體この大地に住つてゐるほどの人は。皆心安く交りを爲すべきことじや。これは造物主とて。天地を始め。人間及び萬物を造らっしゃる。天津神の御心じや。夫に日本人が。萬國の人と交らぬと云は。ありや我儘なことで。天つ神の思召に違ふと云ふものだ。鶴や燕ですら。外國へ往たり來たりするではないか。夫に人として。鶴やつばめにも劣てゐる所爲じやが。さうだと。一つ難問を出して。扱是を言開た物でござる。是を自問自答の文法と申て。先自分で態と難問の語をおこして。又自分で其訣を答へるのでござる。扱其いひ開き方は。なるほど夫は一通り。尤のやうな云かたじやが。さうで無い。日本が外國と交はらぬ訣を今具にいひ開く程に。とっくりと聞ツしやれ。先日本國の歌ばしく羨ましいことは。異國の人と交易せんでもとんと困ることがない。そりやどうじやと云ふに。

まづ地勢が有福で。外國の産物を。取寄すとも宜いからのことじや。又我エウロッパ諸國の者どもの。外國あるきをして。交易を専とするは一體物が足らぬからの事じや。譬へばこゝに。一つの國が有て。かの天地を造らしつた天津神様が。世に殊なる御恵をかけられて。命を保つべき一切の物。満足らうやうになされて。國もけしからず強く又其國人も。勇氣がすさまじくつて。外國から攻て來たる時などに。よく防ぐ手段が有て。外國の物を受けずとも。事の缺けぬほど有たならば。外國と交易をせぬ方が。國の風俗も亂れんで。却て國の大なる益じや。コト云フ云 そんな國は此大地の内を尋ねて。どこに有うと思ふぞ。其は世界萬國に知れたる日本ぢや。いでく其の訣を猶具に云うならば。日本は。此方及び諸國の頭にある國で。天神が是を殊の外に御恵みなされて。けしからず烈く峻岨なる海を。取りまいて置れたる故に。外國から船を寄るに。日本かいわいの海は。浪あらく逆風が吹て。其海中はと云へば。淺瀬が有つたり。巖石が多くて。中々寄ても付れぬ荒海で。大船を入る處がない。其うち只一箇處。長崎の

濠と云が有て。是は少しは大きい船も入るによけれども。其入口が窄まり様々に曲つてよく鍛練したる船主でも。わるくすると乗るこなふ處じや。然れども是より外には。とんとよき濠がない。又海が其通りじやに依て。外國から攻ても。勝れぬやうに。是も天つ神がして置れたのじや。又其國に人の多いことは。言語も及びがたいことで。海邊を見れば。人民夥しく。大小諸の舟の繁多なること。是は國中の人が盡く。海邊に住居して陸地の方は。更に人はなく。空虚だらうと思ふやうだが。なんとさしも大きくはない國で。斯の如く莫太に人の有ると云ふは。こりやとんと理外と云ふものだ。又城郭家居が建續て。とんと一連のやうに成てゐる。尤何村々々云ふやうに。其處に名は有るけれども。是は古へ別々で有た故のこととござる。今は一と連に成て居て。只其古き名を失はぬばかりのこと。實は家居が一續きじやと云てゐる。是は實にさうで。外國へ渡つた人の話や。外國の書物を見るのに。只めつたに廣いばかりで。空地が多く。夫ゆえに不辨理なことばかり。又外國は大きい合せては。濠を初め。人がい

かう少いでござる。扱云には日本人は。大膽と云てよからうか。英雄と云て宜らうか。めッほう強い氣象がある。そりやなんじやと云に。敵の爲に打負るか。若くは敵を規ふことが有て。其を報ゆることがならぬと。爰で少しも辟易かす。云は平氣で。自身に腹を搔切て死ぬ。事に臨んで命を惜まぬこと此通りじや。又日本人はめッぼうに。豪傑だといふ證據になるべき事は。彼の七人の若士が臺灣の國で。とんだ豪傑なる振舞をして此方の國々を膽を潰させたことがある云てかの濱田彌兵衛らが働のことを書てあるでござる。是は寛永年中のこと。其頃は御國からも。勝手次第に。外國へ船を出したる時分。長崎の代官。末次平藏と云人が。天竺の方へ。交易の船を出したでござる。所を其碇臺灣は。阿蘭陀で持て居た時でかの末次氏の船を。其の國の者どもが出て嘲弄し。剩へ積物を。奪取うとさへ致したでござる。仍て此方の船の者も。甚憤つたなれども。向は大船で。しかも武器鐵炮などを以て。ぶすくやつてゐる。此方は只の交易船のこと故に。はかくしき兵器もないから。無念を堪へて。さまざまに上

手を云ひ。品々の物を與なごもして。辛くして長崎へ逃歸たが。此事無念で堪られぬ故に。その事を有の儘に。末次氏へ申した所が。平藏甚の大和心の人で有たる故に。勃然として大に怒り。にッくき夷どもが行狀かな。我計ふべき旨有り。みよく此の後わが國の船に。彼國の者どもが。指もさぬやう。目に物見せてくれんすと申て。則支配内の町人に。右申したる濱田彌兵衛。同く弟新藏と云ふ剛強の者を呼で。此事を具に語り。かの夷ども。我船に不届をいたしたること。我が意趣に似て。私事にあらす。其故は。先第一に。萬國に英雄豪傑の國と稱譽を取たる。此の御國の恥となることじや。此後又いかなる不届を爲んも計り難く。扱は往々他國へ船を出す妨となることじやに依て。其の分には捨置れず。彼等が目に物見するやう。何分よろしく頼むと申た所が。此兩人は元より。かの大和心の大丈夫で。かやうの事に當ては。中々五分でも引氣のなき者ども故に。夫はいと易きことなり。斯やうくの手段を致して。彼等が膽玉を抜て參らん。御心安かれと申して。心安く請合ひ。彌兵衛が子の彌左衛門。外に

四人を談らひ。都合七人の豪傑者が。商人の體に出立て。しろ物を積入れ。かねて渡海はいたし。海路にはよく熟してゐることゆる。大船に真棍しゆぬき烈風に帆を上て。日ならず臺灣の國へ著船いたし。交易のことを云入たで御座る。所が彼國の者も。始めは心を許さなんだと申すことで御座る。然れども船したためたること故に。異き體にも見えぬから。そこで國王へ其事を言上たで御座る。其時分の國王は。尤阿蘭陀より附置て先刻申たる代官で。名は「ヒイトルモイツ」と云者で有ましたが。何の心もなく對面致して。其交易の物を吟味して。直段つけなごをいたして居る所を。彌兵衛はよき圖を見すまして。電の如く飛懸て。其國王ヒイトルモイツを。取て押へて控ぎつけ。懐に匿し持たる脇指を。抜より速く。ヒイトルモイツが胸先へ指付ますと。かの弟新藏。また悴の彌左衛門の兩人が。同く扱つれて立上たで御座る。是を見ると。側まはりの夷どもが。逃出もあり。いや是は大變。ビイ〜。バア〜。ナチュル〜と云て圓き。椽の下へ嘔こももあり。泣も有り。其内に。かの外に居たる四人の者も扱つれ

てかけ入る。城中の騒動云ばかりなく。實に湖の涌が如くで有たと云ますが。さうで有りましたらう。然れども彼七人の豪傑者が。刀を扱持て。其勢の猛なるに恐れ。且少しにても敵對いたしたならば。ヒイトルモイツが。直に刺殺されさうだから。寄付れもせず。國王を助けやうも無い故に。只バア〜と云て。肩で息をついで居る。所で彌兵衛は。其國の語にも達して居たること故に。大地もひくばかりの大音を發して。先靜まり居れ。と叱りつけて。扱しとやかに。彼不届の始末を咎めたる所が。國王が賊に戦ひ恐れて侘言をいたし。其者共は只今は他國へ行てをるに依て。歸り次第重き刑に行て。罪を謝しませうが。夫までの人質に。我が一子を上て置ませうから。ごうぞ我命は免して下されと云て。十二歳になる男子を差出し。今より以後貴國の船へ。指ざしも致させまいと。海山かけて誓を立る故に。彌兵衛は。其國王をば許して。人質の男子を引立て。我船へ乗せ。長崎へ歸たことがある。此事がきつく萬國の評判に成て居るで御座る。扱又いふには。日本の地が自然に堅固で。かつて外國の寇を恐るべき

ことがない。希にも彼蒙古の世祖などのやうに。日本を攻た者も有るけれども。とんと勝ることができぬ。世祖が萬將軍と云者に。大小の船の數三千五百艘に。軍士二十四萬を授て。日本を攻にやつた所が。其浦へ著くと。暴風烈く吹て。夫ほど強大無敵なる軍船。及び船中の軍兵。悉く打碎かれたことも書てある。これも相違のないことで。北條時宗の政事を執たる時分。弘安四年のことで。此世祖と云は。蒙古と云ふから出て。から中を攻取り。其勢に乗て。御國をも下に屬やうとて。度々降参の事を云てよこしたなれども。御取上なかつた所が。猶しつこく云てよこしたる故に。其使に來たる者共のうち。宗と有る者どもを。皆鎌倉の由比が濱へ引出し。首を打切て。獄門に懸られたで御座る。所が。残りの者どもが歸て。其事を申たる所が。彼はこりに誇て。勢ひの強い蒙古のことゆえ。大きに腹を立て。此通り攻て來たで御座る。其とき伊勢の大御神を始め。諸社へ勅使を立られ。御祈も有たる所が。伊勢の風の宮のあらたなる御告が有て。大に神風を吹起し。彼船どもを。一夜の内に吹覆してしまつたで御座る。

其時ふしぎなることは。白衣を著たる神人の船が。彼の大風の中に見えて。けしからず働いたと云ふことで。是はごこから出たとも知れず。定て神々のなされた事で有らうで。此時攻來つたる軍勢の内。生殘て歸た者が。只三人有たと申すことで。是はあの方の書物に書てある。是も不思議なことで。其神風の恐しき事を。彼王に云聞せん爲に。やつぱり神の御計らひかと思はれるで御座る。さうなくては。廿四萬の軍兵。三千五百艘の船が一艘も残らず。ひゃくりかへる程の事だに。三人ばかり生て居やうはずが無でござる。是に於て。さしもの世祖もこりこりして。再び手の出ぬやうに成たで。是が又外國へ廣く知れて。ごこの國でも。舌を振つてゐるで。夫ゆえ西洋の書物にも。此通に恐てある。扱又曰ふには。日本人が戰場に出ては。勇敢謀略のこる所なく。軍法正しく。よく大將の命を聞て。進み戦ふことを悦んで。其圖を外さず。是らは此方が云までもなく。後の世に成たならば。自然と萬國に明かになること故に。日本人をば恐れ敬ふべきことじや。又世の習ひとして。ごかく太平が久しく續く時は。人が柔弱に

なるものだが。日本に於ては。さう柔弱には決してならぬ訣がある。夫は國人が常に古人の武勇を慕て。夫を不斷の心得とし。又子を育てるにも。其泣き。又は常にも昔の勇士の物語をして聞かせ。ごかく武勇をおもに教訓として。幼い時から。心に染つて忘させぬやうにすると申たでござる。是らは實以て外國の人ながらも。能氣の付たことで。此御國人は。けつゝ氣が付んで居ること。いかにも此人の云に違ひなく。よく氣が付たと云ふ訣は。今の世もさやうだが。昔から子等だましの一つ咄しに。金太郎といふは。山姥の子で。熊や狼を引摺たの。或は源の頼光は。大江山と云へ行て。四天王の人々と共に。酒吞童子と云鬼を退治したの。後藤太秀卿が。蜈蚣の玉を射殺したの。また桃太郎が。日本一の黍團子と云を食て。力がついて。是も鬼が島を平げたのと。ごかく子ども内から。武勇になる爲だと見えて。勇ましい事ばかり言て聞せ。また近頃の草冊子には。色々としやらくさいことも有るけれども。三四十年も以前までは。目玉が大きくて。腕や脛にふしごぶ立たる。武者繪の冊子が多かつた物で。是は古人の深く

考へて。したることも有るまいかなれども。御國の人は。自然と武強く。勇しいことを好む故で。何にも是らは結構なこと。行々萬々歳も。此やうに有たいものでござる。扱又曰ふには。大人同士が集れば。先古人の武功のことを。談じ合ことを第一とし。夫を委く評論して。きつく感心して。事有れば。夫をまねやうと心がけ。又兵器と云て。戦の道具にも乏くない。遠くに居て戦ふには。弓有り鐵炮あり。又手と手を交へて戦ふには。鎗と刀とを用ふる。別して其刀の鋭く切れること。ひと刀にして。人體兩断とする程のことじや。ごきつく魂消て有るけれども。まだくこんな事ではない。二ッ胴ざり三ッ胴截りなど云て。土段をかけて切拂ふなど云やうなことがある。扱是はよき序じやに依て申ますが。御國の刀が萬國最上で。夫ゆる外國人の欲がるは云までも無ことで。なんと同じ鐵でする物だが。ごうして御國の刀に限て。さやうに良からうか鍛やうと云ても。外國の人は。別して工夫を凝すことなれば。劣さうも無ことなれども。爰が風土のせいで。別して刀は。萬國に勝れねばならぬ訣が有て。

此の事は先年委く考へて。別に書て置たけれども。今其大略を申さば。先御國は。段々申すとほり。萬國の元首則かしらで。人體で譬やうならば額の處。また刀で云へば。其切先のやうな物で。殊に天地初めの時に。天津神高皇產靈神様が。天の沼矛を伊邪那岐伊邪美二柱の神へ下されて。國を造れと仰せ付られ。又二柱の神は。其矛を指下して。御搔なしなされて。其矛の滴り凝て島と成て。夫がたいと爲て出來たる此御國でござる。皇產靈神の御授け遊はすに。御品こそ有ませうに。矛を下されたには。深き御謂の無らう筈がない。こりや凡人と成たる今の心では。何にとも計られぬことながら。御國の自然と堅固で。人の武強く勝れて居るも。先あらかじめ爰に芽が見えるでござる。又此後大國主神も。八尋矛と云を御杖なされて。御國を御經營あそばし。扱御國を皇孫命へ御譲りあそばさるゝ時に。其御矛をも進せられ。此矛を以て御治めなさらふならば。天の下は安らかに。治まるべき由を仰せられて。差上られたでござる。かやう仰せられたには。是また必ふかく妙なる由縁の有さうなこと。又朝廷の御守り。天津

日嗣の御璽たる所の。三種の神寶の一つが。天の叢雲の御劍と申て。靈驗申すも更なる御事。是も甚深きゆゑ有ることとござる。我翁の歌に。「世の中の有る趣きは何事も、神代のあとを尋ねて知らゆ。と詠れたが。實以てさやうで。是らの事も。とゞくりと考へると。言外にいひ出難き旨味ある事なれども。彼生淡意の人などは。何と聞受られませうか。とござる。又町人百姓に至るまで一腰つゝ挟んでるこりや外國には餘りないことで。自然と云が則神の御心で。押並て武強いので。古くは町人も。皆刀をさへ佩てあるいたと云ことで。既に享保年中。すなはち有徳院殿の御代に。町人の輩が脇指をさして居るのは。何頃よりのことと云。控でも有るか。と御尋が有たる所が。とんと知れず何時からと云ことなく。久しく佩來る。剩へに。以前は刀をも佩たる由を。町奉行まで申上て。其後いよゝ御拂ひなく。今に佩ることとござる。扱又云には。此通り國強く人強く。物が足らざるならば。外國と交るはためなことと云。夫故ちやんと國へ徴をして。交易をせまいと云のじや。自然と此理を日本人が覺えたものじや。

其の自然と云が。實は天つ神の教じや。いでやまた。日本の福有なることを具に云は。まづ第一に。地方が殊れて中正で。夫ゆる南なる國々のやうに。暑くてさうもならぬと云ふやうなことは無く。又北國極寒の。さうもならぬと云ふやうな寒さもない。又是は云ふに及ばぬ事じやが。諸の國々の肥澤で歡ぶべく樂むべきは。天の度敷に取ては。北緯三十度と。四十度との間にあるに及ばない。日本はちやうど。夫に當てゐる。又或人が難じて。日本は嶮岨で石の多い國で。また尖なる高山の多い國じやに依て。其國人が抜群の苦勞をせずは。物は出來まいと云だらうが。夫もまた天津神の御心で。此國を殊更に恵んで。さうして置れたものじや。其故は。さやうに嶮岨で。民の耕作に骨の折るの。則結構なことで。一體人と云ものは。勞せず働かずに居ては。體が倦で。病が發る訣の物じやと云て。其訣が委く書てあるで。扱其訣じやに仍て。此通り天津神が。此國の人を。身體すこやかに骨を折して。頭腦は人間の。神魂の居る處じやに仍て。其頭腦を穎敏と云て。さうすこやかにして。其の神氣を發明させよう

と云の御心じや。中々以て。かの天竺の國などのやうな。熱國くろんぼのやからが。自然生と云て。ひとりでに生てゐる草木を頼みにして。其命をつなぎ。殆鳥獸に等しき者どもと。一つにはせぬと云。天つ神の御心じや。又或人難じて。日本の土地は。かしこやこゝでちぎれてゐて。言は。諸の島を。寄せたやうな國じやが。こりやなんと。悪い國ではないか。と云者も有うが。是も又天津神の御心で。殊更に日本を御恵なされる證據しや。其故は。日本の國の離れてゐるのは。譬へば此地球の國々が。遠く放れて有るやうなもので。さう放れてゐると。其國に依て。産物が各々ちがつて。色々有用の物が出來る。夫で日本一國とんと。外國の物を望まずとも。濟やうに。神の爲れたものじやと云て。御國の國々の産物。美濃尾張の米が好いの。佐渡から金が出る。と云ことを委く云て。又諸の細工の。萬國に勝れて居ることや。何か此外にも。夥しく贊て有るでござる。なんと遙に西とも西のはてなる外國人の。かほご迄にも。御國の實以て神國で。萬國に殊れて。結構な國と云ふことを覺えてゐることと云。其國に

生れて。其國の事を知らずと云は。口惜いことと云ざる。夫のみならず。是は結構な國に生れながら。外國をも贅て。よい國じや。強い國じやなど思て。其の外國の奴隷などが。御國近くのはなれ島へでも。生ごしやくな事でも爲ると驚いて。眉を蹙めなんぞする者が有る。こりや一向はかない愚かな事と云ざる。然れども是は御國人の。底心からさうではない。皆外國の學問を。わるくしたる輩の。習弊を弘めるからのこと。其は先佛者は。天竺ばかりを贅て。彼の國は佛の本國で。尊い國じや。我國は東方粟散國と云て。東方の海へ。粟粒一つを流したやうな國じや。など云て騒ぐ。また儒者は。漢士を稱て。彼國は聖人の國じや。中華じや我國は小國で。且夷狄と云て。るびす國じや。など云て。御國を陋める。又近頃はやり初たる阿蘭陀の學問をする輩は。よく外國の様子も知て居ながら。其中には心得違ひをして。又やみくもに。西の極なる國々を愚負して。譬へばオロシヤは大國じや。夫に人が利發で。其上火術と云て。鐵炮や大石火矢を妙に用つて。夫で百里も先の城郭などを。一打に潰してし

まふ。日本ぐらゐの小國は。こなみぢんにもする程のことだから。けうとい物じやなど云て。其國や。或は萬國の繪圖などを出して。此の通り日本は小國じや。など云て驚かす。既に先年蝦夷の放れ島へ。海賊が來て。盗みをして行たと云ふ。噂の有た時などがさうと云ざる。こりや皆神國の神國たる故を知らず。御國の國體に味いからのこと。またしも其己は。人の國の世話ばかりをして。國體に味いことは。不便ながらも爲方が無れども。其おのれが。おぞけ魂を世に廣めて。普く人にまで。さう思はせるが憎いと云ざる。然れども御國の人は。彼ケンブルも申したとほり。自然に雄々しく。武強いことゆゑ。其の外國を強いかのやうに思ふのも。實は外國びいきの人に言立られて。ちよいとかふれるばかりのこと。其底の心には。此國は神國ぢや。我等も神孫じや。何ぞ毛唐人めが。戎狄どもめが。何程のことを仕出すものか。驅散らしてやるがよいなど云ふ。いやけしからぬ強い者が底に有て。こりや篤胤が申すまでもなくさうと云ざる。中々以て。唐の國の人の様に。えびすじやの。夷狄じやのと云て。禽獸の様に卑

めたる。其の夷狄に。國を盡く奪取られ。あれ程の大國の國人が首を低て。其いやしめられたる北狄を君王と敬ひ。今は國中残す。けし坊主にされてしまつたが。さ。こんな腰ぬけは。御國に限つて一人も有るまいと云ざる。世にはいくらも。道をどくの。教へるの。弘める人がある。夫を聞く。大抵は儒者で。わる賢く狭いことを説ちらす。又道學者など。事々しく名の輩は。心法や悟道とか云ふやうに。佛臭く地獄くさい事を弘めて。人に不人情を示して。やくたいなしの腰ぬけ根性にせうと爲る。その言ふ所をちよいと聞くと。尤らしく聞えるやうなれども。能く考へて見ると。大抵は。賊の道に乖けてゐる事ばかり。云て居ると云ざる。そんなら。其の眞の道と云ものは。いかう六づかしいことかと云ふに。一向むさうさな物で。彼の心法や悟道や。聖賢のまねなどのやうに。出來にくいものでは無く。大道を何の障りもなく。大手を振つて歩行れるやうに。誰しの人にも心安く出來ること。みんなが知らず。其道を歩でゐる。そりやこりやと云ふに。誰もく生れながらにして。神と君と親は尊く。妻

子のかはいと云ことは。人の教を借んでも。みごとにて知てゐる。人の道に關ること。言もて行けば。多端のやうなれども。實は是から割出したやうなもので。先日申す通り。其元は。皇産靈神の御靈に因て。出來る人じやに依て。其眞の情も。直ちに産靈神の御賦なされた物で。夫故に是を性と云てござる。此事は唐の古き人も。よく眞の道に眼の付た人は。一速く云ておいたこと。中庸に。天の命これを性と訓ひ。性に率ふ之を道といひ。道を修むるを教と訓ふとある。此意は。人間に生れると。生れながらにして。仁義禮智と云やうな。眞の情が。自ら具つて居る。是は天つ神の御賦下された物で。則是を人の性と云ふ。此の性の字は。うまれつきと訓む字で。さて夫はごに結構なる情を。天津神の御靈によつて。生れ得てゐるに依て。夫なりに偽らず枉らず行くを。人間の眞との道と云ふ。又其生れ得たる道を邪心の出ぬやうに修し齊へて。近くなとへやうならば。御國人は自から。武く正しく直に生れつく是を大和心とも。御國魂とも云て云ざる。然るを佗の國々の小さかしき教説や。或は御國を忘れて。外

國を慕ふやうな。生れもつかぬ情が添ふと。其を説き
とし。いやさうではない。かうではないと。元の性に
思ひ返し。思い直させるのを。教といふでござる。
先かやうの趣で。なんと眞の道と云ものは。此やう
に安らかなもので返すくも生さかしらな真似
や。心法じやの。悟道じやのと云やうな。佛くさく
しやら臭いとは。さらりとやめて。さうぞ此の大和
心。御國魂をば。枉す忘れず修し齊へて。直ぐ正
しく。清く善はしい大和心に。磨き上げたもので
ござる。古人の歌に「武士の取佩く太刀のつかの間
も。忘れじと思ふ大和魂」と云がある。此の歌の
心は。武士たる者の。常に腰を放たんである太刀の
如く。身に引そへて。又束の間もと云は。直に太刀
の柄にいひ掛て。少しの間もと云ことで。少しの間
も大和心をば忘れまいと思ふてゐる。と云の意で
ござる我鈴の屋の翁が。自らの書像の上に書れた歌に。
「師木島の大和心を人とは。朝日にほふ山櫻花」
と詠れたでござる。まづ師木島と云ふは。直に御國
の事では有るけれども。古へから。大和と云ふ時の
枕詞においたもので。こゝも其の道でござる。一首

の意は。もし人が此方に。君の心はさうでござるぞ。
又大和心と云は。さうした趣でござると問ふたら
ば。答へて。大和心と云ものは。春山の櫻の花の。
たんと美しく咲いてある所へ。朝日のさし登るまゝ
に。其花へさきさらさらと映りて。照相ふやうな物じ
や。又わしが心も。その通りでござる。と答へると
言はれたので。なんと美しく潔く。句ひやがなる
物も多き中に。是程うるはしい事は有まいでござる。
諄いやうなれども。素より御國人は。皆々下の心に。
此美しく潔き心を持って居るけれども。大かたは外國
どもの心に移り。其の本意が曇つてゐる。是をさう
ぞ磨き出して。元の美麗しい心に成たいものでござ
る。この大和心。御國だましひの磨きが足らんで。
辛抱がぐらつくと。諸事の心得違ひがこゝから出来
る。本立て道生と。唐人の申たも。此らに叶てゐる
やうでござる。扱その大和心のみがさう云へば。
我が翁の著されたる書物をよむに及は無いでござ
る。然れども日々。爲す業の忙がしい人々や。い
かう年でも寄れた人などは。夫も出来まいから。其上
く大和心を。辨へたる人に使つて聞くが宜いでござ

る。こりやごちらにして。至る所は同じことで。
「家のなり勿怠りそねみやびをの。歌はよむとも書
は讀むとも。と鈴の屋の翁は詠れたでござる。また
翁の書れたる物に。心ささく心直き人は。善きこと
聞けば速く悟り。こゝろ遠く。心なほからの人は。
悟れども人に負んことを忘れてえうつらす得おもむか
ずて。生のかぎり。枯野の草の。去年のふるから舊
きになづみて。淺みどり春の若葉の。うら細しきを
ば。摘こと知らずて朽はつめり。と言はれましたが。
是は實に此とほりの事で。世間に學問すると云ふ人
は。夥しく有ることなれども。とかくわるい癖が有
てどうもならん。其くせと云ふは。大かたの學者に
はあるでござる。彼をよく世にも申すことだが。目
を卑めて耳を尊ぶ。とか云ふ類ひの人が多く有て。
外國の人の云たことや。又古へ人の言たる事にばか
り拘らひ泥で。我御國人。また近き世の人の言たこ
ごをば。善説もよしとは云はず思はず。又是はよい
と思ふことでも。ヤツぱり先入を改めず。負じ魂に
かの毛を吹て疵を求め。言ひ破らうくと致して。
其心がやがて。學びの道に乖けてゐる事にも。氣が

付んで居らるゝ人もまゝ有でござる。此ことは。唐
の人なごも。悪いことじやと申て。論語には三四箇
條も誠めて有る。さればとて。其よき事も知らぬ内
は。そりや爲方が無れども。苟くも學問に志の有る
人は。此心ばへを常に忘れず。人に氣を付られたな
らば。改むるに憚ることなく。速かに先入の悪弊を
清く捨て。かの翁の言はれたる。去年の古からをば
手折らすに。さうぞ春の若葉のうら細しきを摘で。
おたがひに。眞の道をたぐるやうに致したいもので
ござる。又自分ばかりでも無く。人にも語り聞すの
が。是も人間の眞の道でござる。既に唐人すら朝に
道を聞て。夕に死すとも可なりと申て。眞の道をさ
かうぞならば。朝聞て。夕かたに死んでもよいと思
ふほど。嬉いと云ふことで。唐人すら此通りじやも
の。なんと此道。この御國の有がたきを覺えては。
人には語り聞せずばなるまい。これ及ばすながら。
篤胤が人にも勤める所以でござる。是が即ち天津神
國津神への神忠。これがすなはち恐れながら。天皇
また大將軍家の御厚恩を。粗略に思ひ奉らざる一端
是がすなはち兩親に生出されて。育てゝもらひまし

たる恩返しで。直に人間の道で有らうと存するでござる。何れも其の御心得で。どうぞく。往々も捨おかす。道の學びに。怠りの無きやうに。勵み勤められるが。第一の事とござる。

今度かく。古道の大意を講説するに付ては。又諸道の旨をも。大略講せすは有べからず。仍て是より次々。歌道の大意。醫道の大意。さては俗に謂ゆる神道の大意。また外國より渡り來たる。儒道佛道などの大意をも。次々講せんとす。扱また右諸道の趣を。取りすべて論辨いたし。其より神々の御功德神拜の古法式。先祖の祭りかた。總て世に在る人の今日の心得を述て。玉禰と名けたる講本十卷あり。右等を見聞して。いよ、倍々我が古道の眞實にして。人たる者は必學はずは有るまじき所以を知辨ふべし。

平田篤胤全集刊行

平田篤胤翁は文化文政の交、本居宣長翁の後を承けて起り、其の稀有の天稟と絶倫の精力とを以て、書として讀破せざるはなく、學として究めざるはなく、國體を講明し大道を宣揚して、大に國民の自覺を喚起し忠愛の精神を鼓吹せられ、其の影響の王政維新并に其の後の文運に及べるもの頗る大なるは多言を須たずして明かなる所なり、

本全集は翁の著作にして、既に上梓せられたるものは勿論、寫本のまゝに傳はれるもの、草稿のまゝなるもの悉皆これを網羅し、翁の門人中現存せる巨擘文學博士井上頼國、熱田宮々司角田忠行等諸氏の校訂を経たるものなり、加茂全集本居全集現に世に流布し、學界の本全集を渴望せるや久しく、殊に思想界の現状は之が刊行を促して止まざるものあり、此の企圖蓋し大方篤學諸彦の賛成を得べきを疑はず、斯學の淵叢たる本全集は實に政治道德宗教等の事に志ある人士の文庫に缺くべからざるものなり、希くは此の機を逸せず之を備へられんことを、

文學博士 井上賴圀 監修
 熱田神宮々司 角田忠行 校訂
 平田盛胤 校訂
 三本五百枝

平田篤胤全集

菊版美裝
 全十五册

▲菊版クロス製美裝一册紙數八百頁以上
 ▲正價一册金貳圓全十五册金參拾圓也
 ▲外ニ送本料一册ニ付東京市内金四錢内地金拾貳錢臺灣清朝金參拾錢
 ▲全部購求の旨直接豫約申込者に限り正價金貳圓の一割引の事尤前金に及ばず凡て出版の都度代金并に送本料を請求し御送金済の上に送本する者こそす

發行所 法文館書店

賣捌所

東京市麹町區飯田町五丁目八番地
 振替貯金口座東京五五四四番
 大京市東京堂、上田屋、至誠堂、東海堂、北隆館、會通社、大阪市實文館、文海堂、京都市松田、若林、名古屋市川瀬、久留米市菊竹、熊本市長崎次郎、其他各地番館店取扱

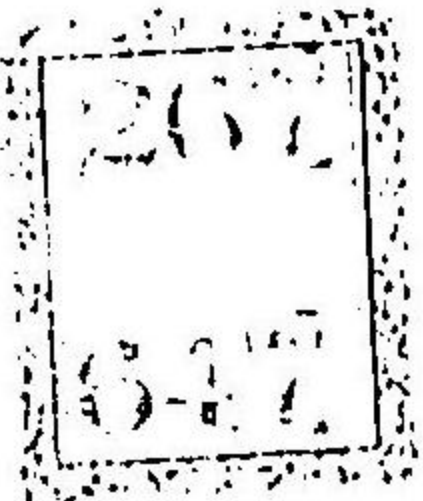
平田全集掲載目錄

刊本の分
 古史成文(外に仲夏天皇迄)
 古史傳(三十二卷)
 古史微開題記共
 玉手襪
 古史本辭經
 古今妖魅考
 神字日文傳
 靈能真柱
 春秋命歷序考
 皇國度制考
 弘仁歷運記考
 鬼神新論
 赤縣太古傳
 三五本國考
 三易由來記
 三神山餘考
 大扶桑國考
 皇典文彙
 祝詞式正訓

三十一册
 一七册

久學問答
 國宗仲景考
 太皞古歷成文
 天津祝詞考
 半頭天王曆神辨
 童蒙入學問
 赤縣太古傳成文
 說文解字序
 古易成文
 本教千字文
 宮比神御傳記
 俗神道大意
 志豆能岩屋
 古道大意
 氣吹於呂志
 悟道辨
 西籍概論
 出定笑語
 同上附錄
 歌道大意
 氣吹舍筆叢

一一一册



發行所

平田學會事務所

東京市麴町區飯田町五丁目八番地



發行者

平田學會

東京市麴町區飯田町五丁目八番地

右代表者 室松岩雄

印刷者

遠藤廉治

東京市麴町區飯田町二ノ六八番地

印刷所

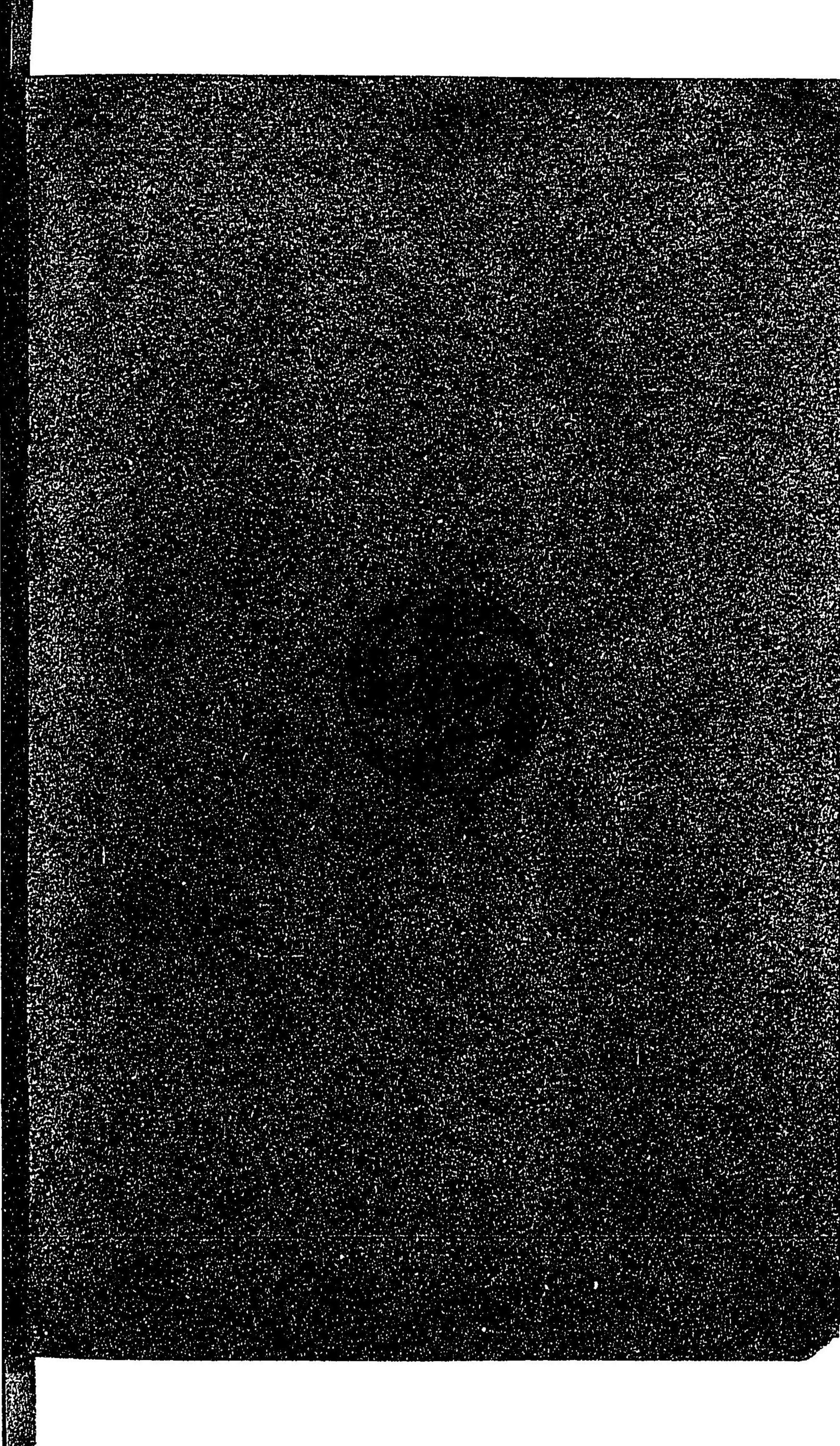
公木社

東京市麴町區飯田町二ノ六八番地

明治四拾五年二月廿五日印刷
明治四拾五年二月廿八日發行

(定價金二十五錢)

寫本の隨大或問	一	冊
天說辨々	二	冊
神拜詞解	一	冊
天柱五嶽考	一	冊
伊勢物語集	二	冊
古學傳	二	冊
葛仙翁文集	二	冊
赤縣周表	三	冊
夏殷周表	四	冊
孔子集語	一	冊
老子集語	一	冊
五藏真形圖說	一	冊
太易古易傳	一	冊
三層山來記	二	冊
天竺無著論及附錄	二	冊
古史年譜	一	冊
春秋曆術編	一	冊
前漢曆志辨	一	冊
太吳古曆傳	一	冊
徵古歲時記	一	冊
印度歲時記	一	冊
印度歲時記	一	冊
出定笑話原稿	一	冊
密法修事部類	一	冊
再生紀綱	一	冊
阿婆書	一	冊
稻生物怪錄	一	冊
氣吹廼舍歌集	一	冊
氣吹廼舍文集	一	冊
雜稿拾遺	一	冊
化育論稿	一	冊
自輦策稿	一	冊
葛仙翁傳	二	冊
三大考辨々	二	冊
吉家系譜傳稿	二	冊
黃帝傳譜記	三	冊
仙傳異聞	三	冊
仙傳異聞附錄七生傳の記	三	冊
舊事記疑問	三	冊
伯家學則演義	三	冊
玉手總論追加一名章靈考	三	冊
天石館之記	三	冊
ひとりごと	三	冊
鐵胤翁著述	二	冊
毀譽相半書	二	冊
兒手拍	二	冊
延胤翁著述	二	冊
馭戎論附錄	二	冊
古學二千文略解	二	冊
糟粕集	二	冊
與遠西學者書	二	冊
胤雄翁著述	二	冊
伊吹舍門人姓名錄	六	冊
以上	六	冊



202052-000-9

特69-544

古道大意

平田 篤胤/述

M45.2

EDB-0058

